関西大学『社会学部紀要』第53巻第１号，2021，pp.1-46　　ISSN 0287-6817

社会人の価値観
──大学を卒業すると何が変わるのか？──

片　桐　新　自

Working People's Values:
What Will Change after Graduation from University?

Shinji KATAGIRI

Abstract

I have been conducting value surveys of university students seven times every five years since 1987 for a period of 30 years. In 1995, I conducted a value survey of young working adults who were university students in 1987, and investigated how their values changed from the time they were students. For the first time in 25 years after 1995, I conducted a survey of working adults who graduated from university and clarified how their values changed after graduating from university.

By comparing with the seven university student surveys and the 1995 adult survey, it became clear how values change due to the influence of "age," "generation," and "era." The effects of changes in work position and changes in social position due to marriage and children can be seen in many items. It became clear that people who lived in the same era had similar changes in values over the ages.

Keywords: values, working people, university student age, generation, era

抄　録

筆者は、1987年から５年おきに７回30年の長きにわたって大学生の価値観調査を行ってきている。その間に1995年に一度、1987年時点で大学生だった若い社会人の価値観調査を行い、学生時代から価値観がどう変化するのかを調べたことがある。今回25年ぶりに、大学を卒業した社会人の調査を実施し、大学卒業後どのように価値観を変化させるのかを明らかにした。

７回の大学生調査との比較や、1995年の社会人調査と比較することで、「年代（年齢）」「世代」「時代」の影響によって価値観がどのように変わっているかが明らかになった。仕事上の立場の変化、結婚し子どもを持つことによる社会的立場の変化の影響は、当然ながら多くの項目で見られる。また他方で、年代（年齢）を超えて、同じ時代を生きるものとして同じような価値観の変化をしているものも見られることも明らかになった。

キーワード：価値観、社会人、大学生、年代、世代、時代

＜目次＞

はじめに
１．調査対象者のグルーピングと分析の視点
２．家族と仕事に関する基本情報
３．大切にしていること
４．大人自覚と自分らしさ
５．ジェンダー観
６．ネットの利用
７，政治意識
８．求める社会
おわりに

はじめに

1987年から５年おきに７回30年にわたって大学生の価値観調査を行ってきた[1)]。その間に1995年に一度、1987年時点で大学生だった若い社会人の価値観調査を行い、学生時代から価値観がどう変化するのかを調べたが[2)]、その後、調査環境が厳しくなり、卒業生の調査ができないまま時間が経過してしまった。

2020年は1995年の社会人調査からちょうど四半世紀にあたる25年を経過していたので、この機会に久しぶりに社会人調査にチャレンジすることにした。しかし、1995年のように卒業生名簿を大学から借りられる時代ではなくなっていたので、連絡が取れる自分自身の教え子であるゼミ卒業生を対象とすることにした。

関西大学での私のゼミ卒業生は、1994年に卒業した第１期生から2020年に卒業した25期生までがこの調査の時点ではおり、500名以上を数える。そのうち、約300名とはメールやLINE等で連絡がつくので、彼らに連絡を取り、Googleフォームで作成した調査への回答を依頼したところ、249名から有効回答を得ることができた。

本稿はその調査結果の報告である。主たる分析視点は２つある。ひとつは、大学を卒業し社会人になると価値観はどう変化するかということである。もうひとつは1995年の社会人と2020年の社会人がどのような点で異なるのかを分析することである。どちらの分析を

1）最新の2017年調査までを含んだ結果は、片桐新自『時代を生きる若者たち――大学生調査30年から見る日本社会――』関西大学出版部、2019年としてまとめている。

2）この社会人調査の結果は、片桐新自「「新人類」は今――「大人」になりきれない若者たち――」（『関西大学社会学部紀要』第28巻第１号，111-142頁，1996年としてまとめている。この時の調査対象者は、関西大学社会学部を1988年～1991年に卒業した４学年の卒業生で、卒業生名簿から960名を系統抽出し郵送調査を行い、288名から有効回答を得た。

する上でも、年齢幅の大きな今回の調査対象者をひとつのまとまりとして扱うことには無理があるので、いくつかのグループに分ける必要がある。詳細は節を改めて紹介しよう。

1．調査対象者のグルーピングと分析の視点

有効回答を寄せてくれた回答者は249名で、数名私のゼミ以外の卒業生も回答者に入っているが、すべて関西大学社会学部社会学専攻の卒業生である。年齢は22歳から50歳までいる。さすがにこの年齢幅を全員「社会人」ということでまとめてしまっては十分な分析はできなくなるので、下記の５つのグループに分けることにした（表１参照）。

表１　調査対象者のグループ別人数

世代	年代	期生	入学年	男性	女性	小計	卒業年	男性	女性	小計	計
第１世代（90年代調査世代）	40代（43-50）	1	1990	6	5	11	1994	6	5	11	56（27/29）
		2	1991	7	6	13	1995	7	6	13	
		3	1992	1	4	5	1996	1	4	5	
		4	**1993**	6	3	9	**1997**	6	3	9	
		5	1994	4	5	9	1998	4	5	9	
		6	1995	3	6	9	1999	2	6	8	
			1996				2000	1	0	1	
			1997				2001				
第２世代（2002調査世代）	30代後半（35-42）	7	**1998**	5	2	7	**2002**	3	2	5	53（23/30）
		8	1999	3	4	7	2003	5	4	9	
		9	2000	2	9	11	2004	2	8	10	
		10	2001	5	8	13	2005	5	8	13	
		11	2002	2	3	5	2006	2	4	6	
		12	**2003**	6	4	10	**2007**	6	4	10	
第３世代（2007調査世代）	30代前半（30-36）	13	2004	6	7	13	2008	6	7	13	50（23/27）
		14	2005	3	4	7	2009	2	4	6	
		15	2006	2	1	3	2010	2	1	3	
		16	2007	5	6	11	2011	6	6	12	
		17	**2008**	7	10	17	**2012**	7	9	16	
第４世代（2012調査世代）	20代後半（26-31）	18	2009	5	5	10	2013	5	6	11	42（18/24）
		19	2010	5	9	14	2014	5	9	14	
		20	2011	5	4	9	2015	4	4	8	
		21	2012	5	5	10	2016	4	5	9	
第５世代（2017調査世代）	20代前半（22-27）	22	**2013**	4	7	11	**2017**	6	7	13	48（23/25）
		23	2014	5	3	8	2018	4	3	7	
		24	2015	6	8	14	2019	7	8	15	
		25	2016	6	7	13	2020	6	7	13	
		計		114	135	249	計	114	135	249	249

単純に同じ年数の学年でグループを作っていないのにはいくつかの理由がある。1999年４月から１年間海外研修に行っており、1996年と1997年入学生のゼミを持たず２学年間が空いたので、それ以前の学年で第１世代としてひとつのまとまりとすることにした。第２世代以下の区切りに関しても様々な配慮が働いている。「はじめに」でも述べたように、1987年に大学生だった卒業５年目から８年目の若い社会人を1995年に調査しており、その層と同じ年齢層のグループを作っておく必要があったため、2013年卒業から2016年卒業の４学年で第４世代を形成することとした。おのずと、それより若い卒業１年目から４年目の４学年でもっとも若い第５世代を形成することとなった。残りの2002年卒業から2012年卒業の11学年は、調査対象者数を鑑みて2007年卒業と2008年卒業のところで区切ることとし、第２世代と第３世代を形成した[3)]。

以上から、40歳代以上――２名の50歳を含む――の第１世代（平均年齢46.5歳）、30歳代後半が中心の第２世代（38.0歳）、30歳代前半が中心の第３世代（32.4歳）、20歳代後半が中心の第４世代（28.4歳）、20歳代前半が中心の第５世代（24.0歳）という５つの社会人グループができた。以下の分析はこのグループ別に行っていくことにする。

分析の視点としては、３つの「代」に注目したい。それは、「年代」「世代」「時代」の３つである。まず、年代だが、もちろんこれは年齢層のことである。今回の調査では、22歳から50歳までが調査対象者に入っているが、同じ社会人と言っても年齢によって価値観が異なるはずである。多くの人は年齢が上がることによって、ライフステージが変わっていく。結婚をし、子どもを持ち、親となり、またその子の年齢によっても価値観は変わっていく。仕事でも地位が上がり、責任を持つ仕事が増え、仕事との関わり方も変わる可能性が高いと考えられる。

次に世代とは、いつ生まれ、どのような時代を経験しながら育ってきた人たちかを示すものである。この世代ゆえに作られた価値観は根強く残ることも多い。たとえば、もっとも有名な「団塊世代」は1947年～1949年の３年間に生まれた世代を言う。この世代は戦後のベビーブーム世代なので、他世代に比べて人数が非常に多い。そのことにより、社会への影響も大きく、他世代が経験してきていないような経験をしてきている。戦後の民主化教育が普及していく時代に教育を受け、近代家族が急速に増加した高度経済成長期に子ども時代から青春時代を送っていることによる影響もあるだろう。

3）表１で太い数字にしてある学年は、各回の大学生調査の対象にならなかった学年を示している。

団塊世代のような有名な名のつく世代でなくとも、それぞれいつ生まれ、どんな時代でどんなことを当たり前として受け止めてきたかによって異なる価値観が出来上がり、その価値観の少なくない部分が、年齢が上がっても変わらないことも多い。特に、青年期までに確立した価値観は世代の特徴が表れやすいと考えられる。

他方で、時代の変化によって変わっていく価値観もある。たとえば、ネット環境の激変はどの年齢層も経験し、アクセスするメディアの変化や人間関係の変化などを生み出している。また、国際関係や政治状況の変化も世代を超えて共通に経験し、一定方向への変化を生み出す。同じ時代を生きていることにより、年代、世代を超えて同じような影響が現れることは十分考えられることである。

30年間行ってきた大学生調査は、「年代（年齢層）」を固定し、それぞれの「時代」の影響を受けた、どういう「世代」が登場したかを分析する試みであったと言える。今回の調査は、22歳から50歳まで調査対象者になっているので「年代」による相違の分析ができ、また1995年の社会人調査と比較することで、同じ年齢層の若い社会人が異なる世代としてどのような価値観の違いを持っているのかも知ることができるだろう。

2．家族と仕事に関する基本情報

まず、年代別の既婚率を示しておこう。図１は、一般の人々の既婚率と比較できるように作成したグラフである[4)]。男性に関しては、卒業して間もない20歳代前半層以外は一般人より婚姻率が高い。女性では20歳代の前半・後半はともに一般人より婚姻率が低いが、30歳代前半ではかなり高い。20歳代の女性と20歳代前半の男性が一般人より低めなのは、４年制大学を出て働き始めるのが相対的に遅いことを考えれば仕方がないところだろう。むしろ、男性では20歳代後半以上はすべて、女性でも30歳代前半の婚姻率が一般よりかなり高いことに注目したい。調査対象者は、全員関西大学社会学部社会学専攻の卒業生だが、彼ら――特に男性たち――が一般的に結婚相手としては比較的に高評価を得られる人たちだということを証明しているデータと言えよう[5)]。

4）一般の婚姻率は、2015年の国勢調査のデータから、本調査の各グループの平均年齢に近い年齢の婚姻率を持ってきている。平均年齢がキリのよい整数値に近い場合は、その年齢の婚姻率を、中間的な値を取った場合は、前後の年齢の婚姻率を足して２で割ったものを比較対象層の婚姻率とした。

5）関西大学は、伝統のある名門大学である上に、そこに入学してくる人たちは、勉強しかしてこなかったタイプの人は少なく、バランスが取れている人が多いと評価されていると私は見ている。

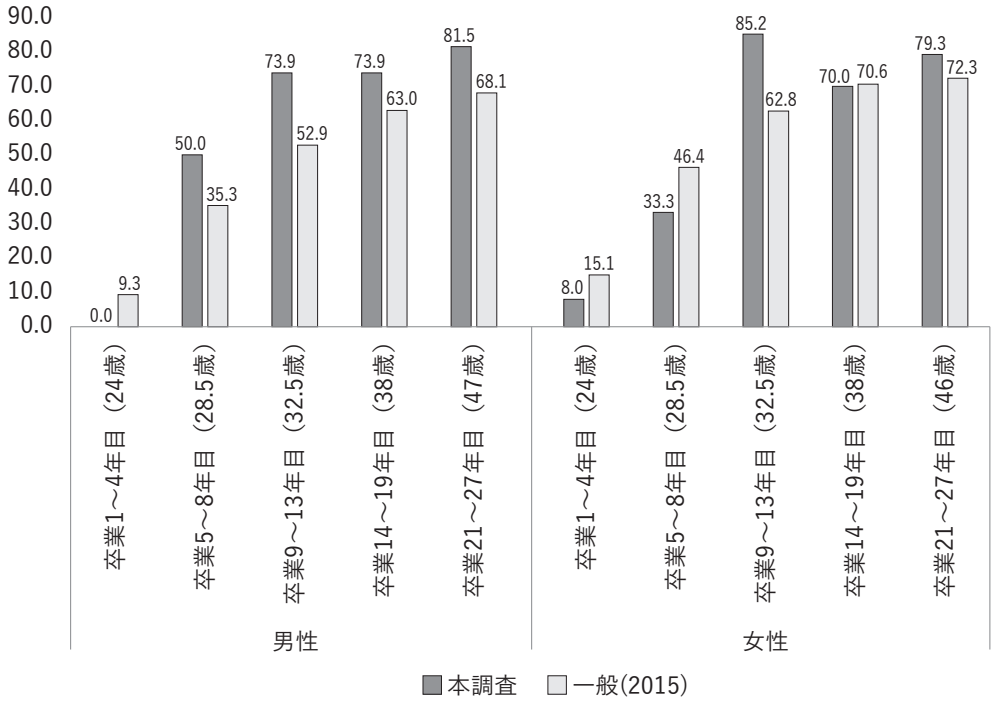

図１　婚姻率

次に、子どもの有無についてだが、男性では30歳代前半、30歳代後半、40歳代の３層においてほぼ６割が子どもを持っている（図２参照）。子どもの数は、若い年代の方がまだ少ないので今後増える可能性はあるが、子を持つ割合は男性では６割くらいなのかもしれない。

他方、女性の方は30歳代後半、40歳代では７割を超えるが、30歳代前半では５割をわずかに超える程度である。まだ若いので今後もう少し増えていくことだろう（図３参照）。ちなみに、40歳代の女性たちはもうこれ以上子どもを産まない可能性が高いと考えると、現時点でのこの層の平均出生数は1.52となる。合計特殊出生率の計算の仕方とはまったく異なるが、生涯１人の女性が何人子どもを産むかという指標としては似た性格のものと見るならば、この10年ほどの合計特殊出生率は1.3の後半から1.4の前半くらいなので、それよりはやや高めと言える。

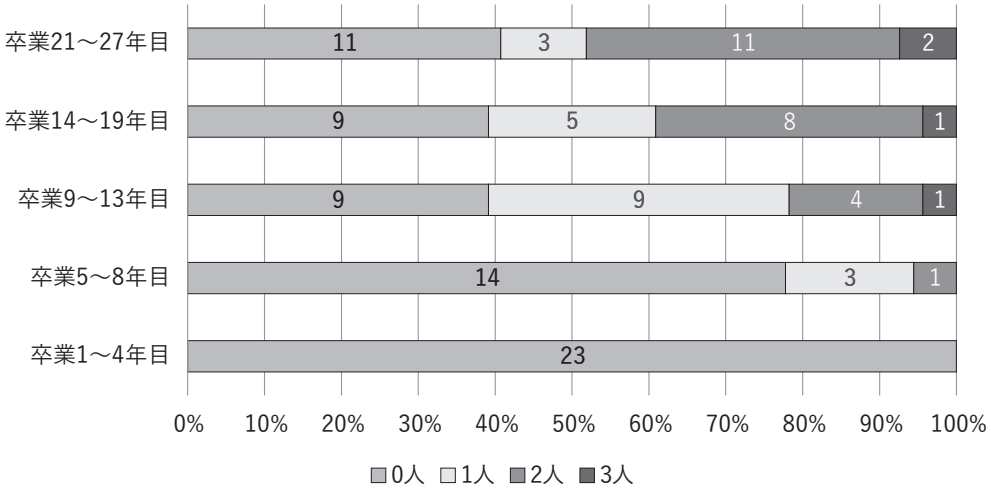

図２　子どもの数（男性）

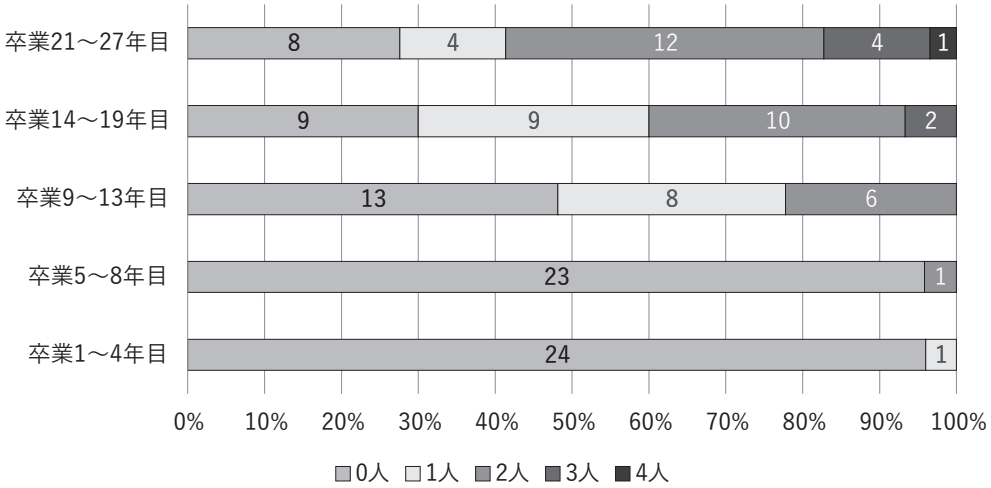

図３　子どもの数（女性）

次に仕事について見てみよう。図４は男女別に勤務形態を見たものである。当然ではあるが、定年まで勤務可能なフルタイムの正規雇用者は、男性では30歳代後半層でわずかに９割を切るが、その他のグループではすべて９割以上であるのに対し、女性で９割を超えるのは20歳代前半のみで、20歳代後半は79.2％、30歳代前半は77.8％、30歳代後半は36.7％、40歳代は48.3％となっている。

女性で無職と答えた人は全グループ合わせて18名いるが、そのうち16名は子どもがおり

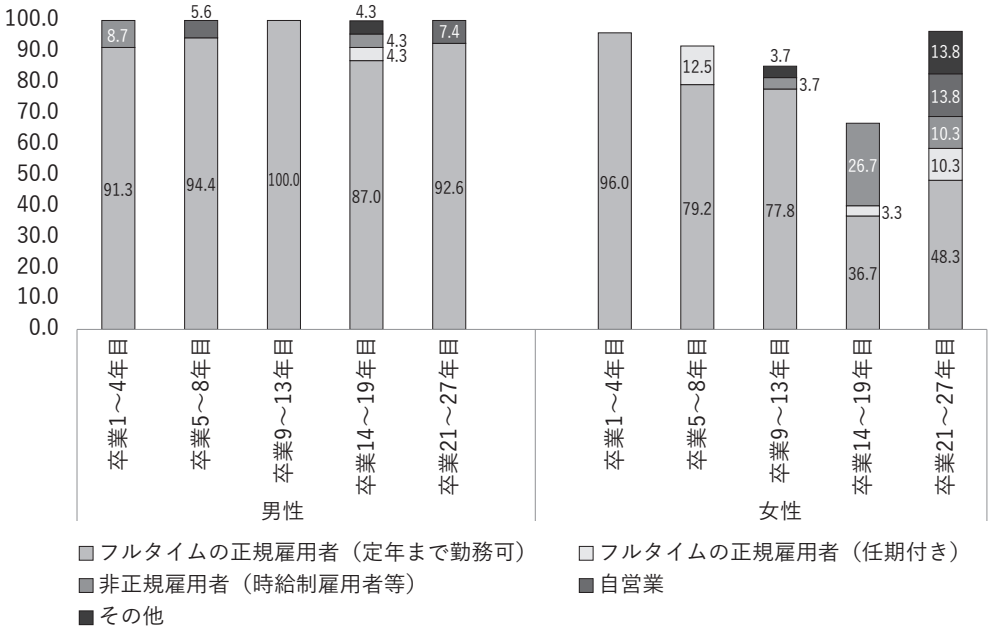

図４　勤務形態

それも小学４年生以下の子どもが最低１人はいる人たちである。やはり小学４年生くらいまでが手がかかり、女性が専業主婦を選ばなければならなくなっているようだ。特に、30歳代後半の層は、その他の勤務形態を加えても３分の２しか賃労働をしておらず、この年齢層がＭ字カーブの底になっていると言える。一般の統計でも近年は30歳代前半から後半が一番底になっている。ただ、そのカーブは大分浅くなってきたと言われているが、関大生のこのデータでは、かなり底は深く見える。自分自身も高学歴である関大卒の女性たちは子どもの教育に力を入れるために、ある時期専業主婦になることを選ぶ人が多いのかもしれない。

40歳代になるとほとんどの女性が再び仕事を持つようになるが、フルタイム労働に戻れる人は多くなく、任期付き雇用を含めても６割に満たない。やはり、子育てと両立できる仕事選びということになると、通常のフルタイム正社員に戻るのはまだ容易でないのだろう。

この第１世代の女性たちは、約９割が「結婚して子どもが生まれても、できるだけ職業を持ち続けた方がよい」を選択している。ただし、そこで想定された職業は必ずしも通常のフルタイムの仕事でなければならないということではないと考えることもできるだろう。つまり、あえてフルタイムの仕事には戻らないという選択をしている可能性も十分にある。

実際無職と答えた割合は3.4％で、女性グループの中でもっとも低い。彼女たちの「現在の生活満足度」は、「かなり満足している」が20.7％、「どちらかと言えば満足している」が79.3％で合わせて100％になるが、全員が「満足」を選んだのは、すべてのグループの中で、この層の女性たちだけである。通常のフルタイムの正社員になることばかりが好ましい働き方とは考えていないことの証左になると見てよいのではないだろうか。

3．大切にしていること

「一番大切なものは何か」という自由回答形式で尋ねた質問への回答では、「家族」と書いた人が圧倒的に多かった。図５は、大学生調査のカテゴリーと同じ「家族・友人・人間関係」に分類した回答をより細かいカテゴリーに分けて示したものである。

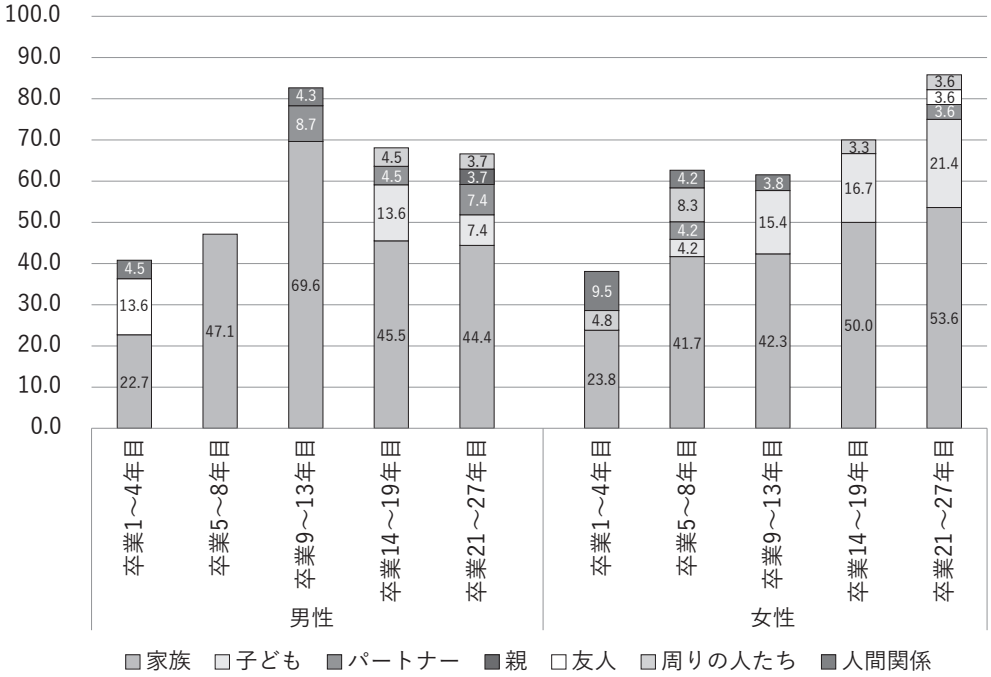

図５　大切なものが「家族・友人・人間関係」の内訳

2017年の大学生調査においては、「家族・友人・人間関係」のカテゴリーに分類できる回答は関大社会学部生では38.4％だったが[6)]、この社会人調査では、男性の場合は30歳代以上の層で、女性の場合は20歳代後半以上の層において、すべて６割を超えている。「家族」と書いた人だけに注目するなら、男女ともに20歳代後半以上のすべての層で４割を超えている。大学生でも「家族」と書く人はそれなりに多いが、やはり自分が生まれ育った家族よりも、自分が結婚して創った家族の方が思い入れが強くなるようだ。

また、大学生では出てこない回答である「子ども」という回答が、特に女性でかなり多く出てくることが注目される。女性で「子ども」と書いた人は全体で16名いるのに対し、男性では５名である。他方で「妻（パートナー）」と書いた男性は４名いるが、「夫」と書いた人は１人だけというのも興味深い結果だろう。

年齢による差を見ておくと、卒業１～４年目の20歳代前半の若い社会人は、まだ大学生との差が小さい。本格的に大学時代と価値観が変わり始めるのは、20歳代後半からのようだ。男性は30歳代前半で「家族」と書いた人が69.6％と突出して多いが、このグループの既婚者17名のうち15名が「家族」と書き、１名が「パートナー」と書いている。20歳代後半の既婚男性も９名中７名が「家族」と書いている。結婚してまだ年数の経っていない若い夫にとって家族はかけがえのない大切なものとしてすぐに頭に浮かんでくるものなのだろう。30歳代後半になると、子どもの比重が増し、40歳代では「家族・友人・人間関係」も少し多様化してくるようだ。女性の方は20歳代後半以上では、年齢が上がるほど「家族」「子ども」の比重が増していることが明らかである。

大切にしているものは「家族」と答える人が多いということと強く関連するのが、生活目標である（図６参照）。2017年の大学生調査において、「その日その日を、自由に楽しく過ごす」が38.5％（関大社会学部生だけでも36.2％）でもっとも選ばれる生活目標になったが、この社会人調査でこの選択肢を選ぶ人はわずか10％しかいない。これは、大学生だけでなく一般の人々を対象としたNHKの調査（25.6％）と比べても非常に少ない。今回の調査でもっとも多く選ばれたのは、「身近な人たちと、なごやかな毎日を送る」で51.4％、ついで「しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く」で33.3％である。この２つの選択率は、大学生調査との比較ではもちろん、NHK調査の結果と比べても高い。本調査の対象者たちは、手堅く生きていこうとしている人たちであると言えよう。この手堅さは、

6）比較対象としての妥当性を確保するために、本稿では断わりを入れない限り、2017年大学生調査として紹介する数値は、関大社会学部生のみを対象としたデータである。

平均点より少し上の人生を歩むように水路づけられた関西大学卒業生の特徴と言えるかもしれない。

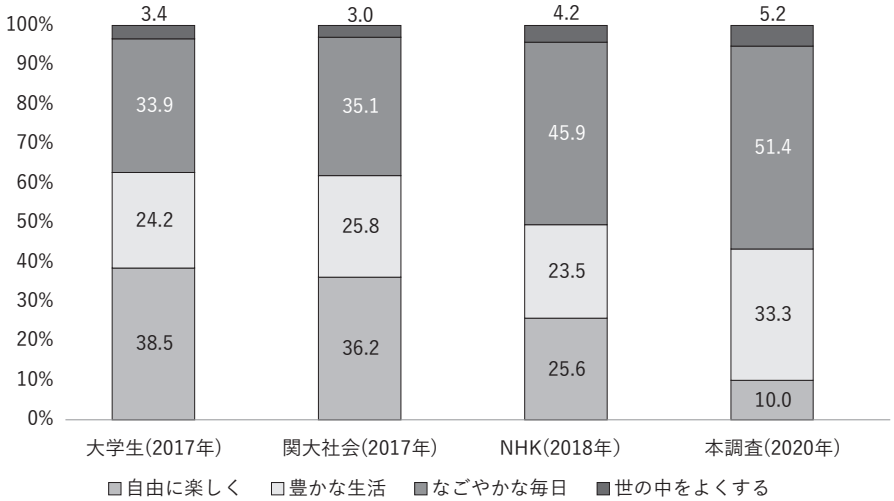

図６　生活目標

年代別に見ると、やはり一番若い20歳代前半グループにおいては「自由に楽しく」がやや多いが、それでも男女合わせて18.8％しかおらず、2017年調査の大学生よりはかなり低い。このグループはちょうど2017年調査の時に大学生だった世代なので、大学時代と比べると、「その日その日を自由に楽しく」を選ぶ人はかなり減ったと言えよう。代わりに増えたのが、「身近な人となごやかな毎日」である。社会に出ることにより、学生時代のような「お気楽」な考え方では生きられないということを、すぐ学ぶことになるのだろう。

男女別に見ると、30歳代前半の男性で「計画を立てて豊かな生活」が１位になった以外は、すべてのグループで１位は「身近な人となごやかな毎日」で、２位が「計画を立てて豊かな生活」である（図７参照）。女性は「その日その日を自由に楽しく」を選ぶ人は非常に少なく、20歳代前半では４名いるが、20歳代後半以上では各グループ１名ずつしかいない。ただし、大学生でもかつてはそこまで多数派が選ぶ生活目標ではなかったのが、最近急速に伸びてきたので、今後社会人の中でもじわじわとこの生活目標を選ぶ人が増えていく可能性はある。結婚しない、家族は作らないという生き方選択をする人が増えれば、年齢が上がっても、「その日その日を自由に楽しく」を選ぶ人があまり減らないということが起きるかもしれない。

社会人では家族の大切さも増しているが、仕事に対する思いも学生とはかなり異なって

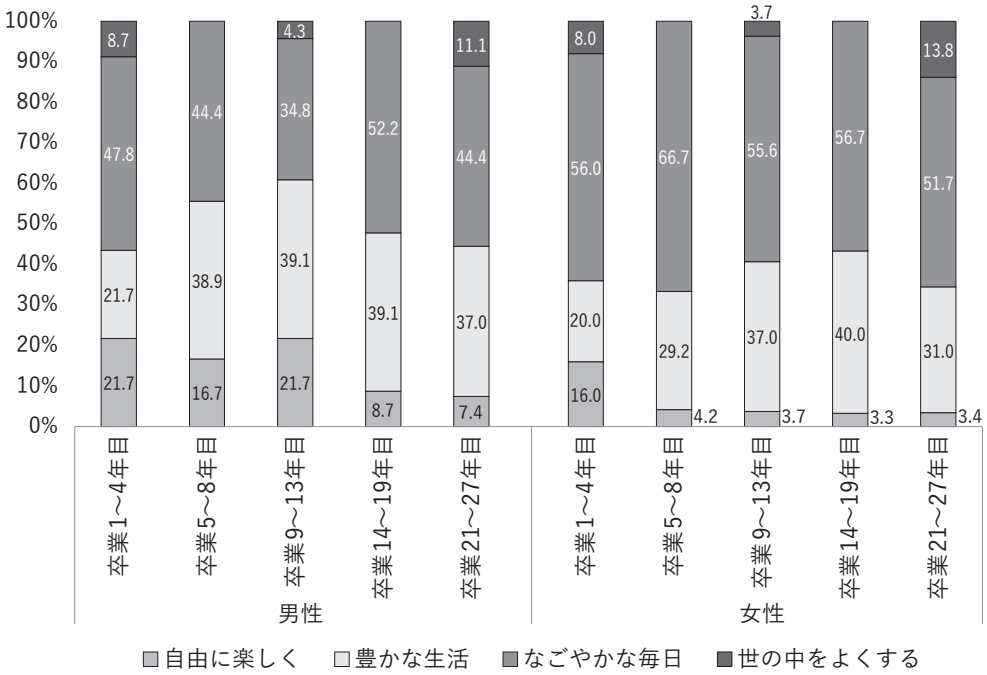

図７　年代別に見た生活目標

きている。図８を見てもらうとよくわかると思うが、年齢が上がるにつれ、仕事派――「余暇も時には楽しむが、仕事の方に力を注ぐ」（=「仕事中心で」）+「仕事に生きがいを求めて、全力を傾ける」（=「仕事を生きがい」）――が増している。「仕事派」は男性の年齢の高い層に多いが、女性の場合は「仕事派」と価値観が近い「均等派」――「仕事にも余暇にも同じぐらい力をいれる」（=「同じくらいで」）――も含めるなら、綺麗に年齢が高くなるほど仕事への力の入れ方が強くなると言えるだろう。

しかし、働き始めてまだ年数のあまり経っていない20歳代前半や後半の年代においては、大学生――2017年調査での関大生の仕事派の割合は13.0％――より仕事派が少ない。20歳代前半の男性たちでは、なんと仕事派は１人もいない。これは、20歳代頃の仕事は、上から使われることばかり多く、学生時代に想像していた以上にしんどいと若い社会人が思っているということの表れだろう。しかし、30歳代以上になると、仕事も命令されて行うものから、自分で考え行う部分も増えていき、充実感を得られるようになるために、仕事にやりがいを感じるようになって行くということなのだろう。

生まれ変わり希望は、大学生の場合は、上記の仕事と余暇のどちらに力を入れたいかによって男女ともに差が出ていた。男性への生まれ変わり希望をもつ者は、男子学生の仕事

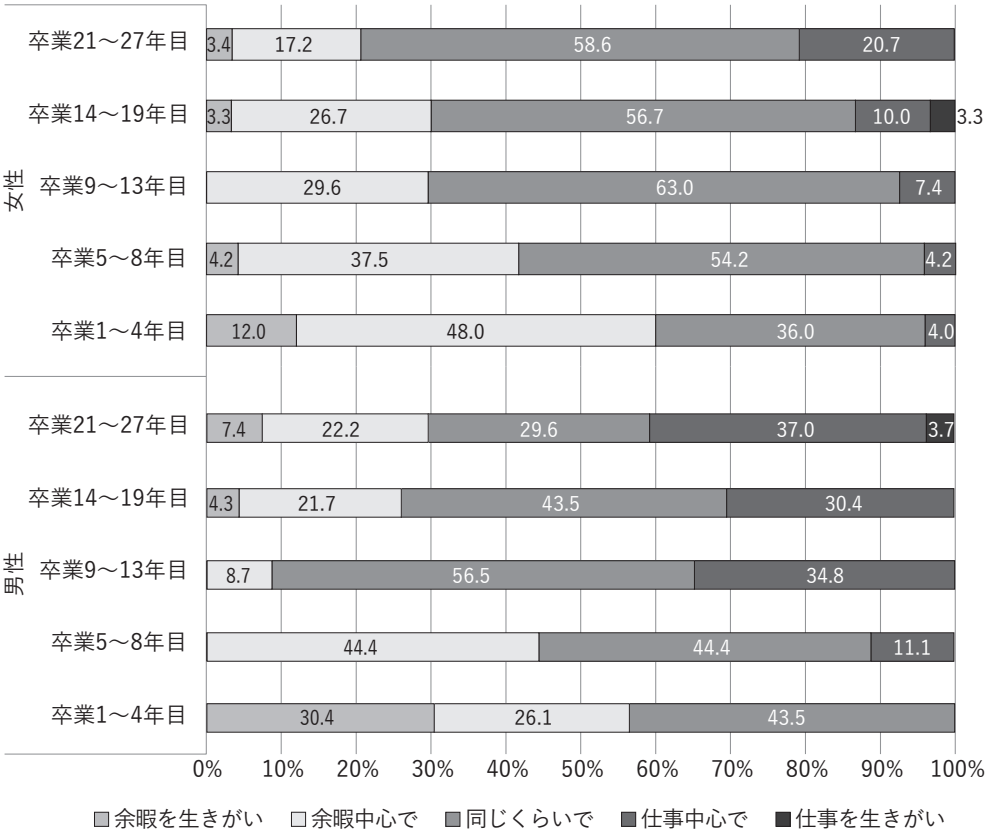

図８　仕事と余暇

派では95.5％、女子学生の仕事派では61.5％で、余暇派や均等派よりかなり男性志向が強く出ていた。確かに、仕事をバリバリやっていく上ではまだ男性の方がより能力を発揮させてもらえる機会を得られるイメージがあるのだろう。

しかし、社会人に関しては、男性の場合は仕事にやりがいを感じているかどうかが大学生と同様に関連が出ているが、女性に関しては仕事のやりがいとは関係なくなるようだ。むしろ、女性の場合は、子どもがいるかどうかで差が出ている。

男性の場合、「仕事派」や「均等派」では男性への生まれ変わり希望者が８割前後いるのに対し、「余暇派」では３分の２強程度に留まっている。逆に言うと、余暇派では女性への生まれ変わり希望者が３分の１近くを占めていることになる（図９参照）。

他方、女性の場合は仕事との関連より、子どもの有無との関連が強く出ている。子どもがいる女性では８割以上が、生まれ変わっても女性を選んでいるのに対し、子どものいな

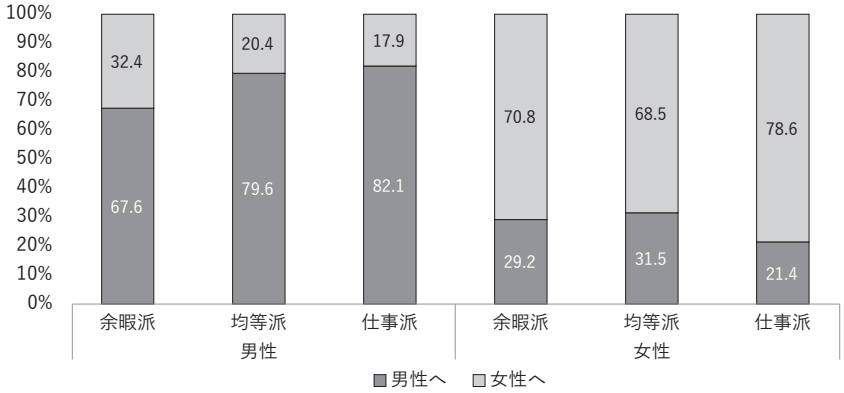

図９　生まれ変わり希望（「仕事と余暇」との関連）

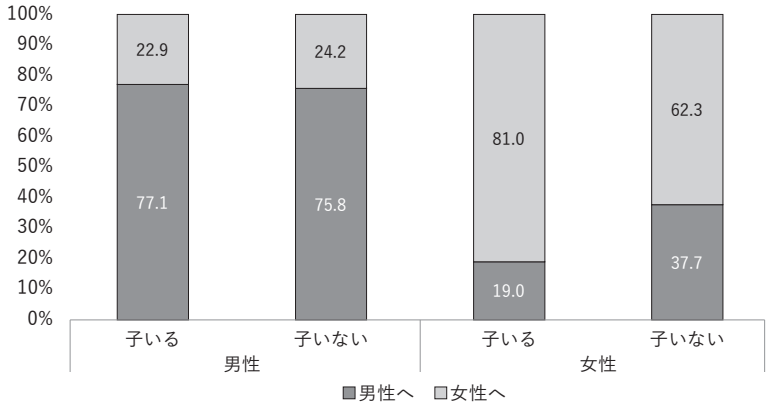

図10　生まれ変わり希望（「子どもの有無」との関連）

い女性ではその割合は６割強に過ぎない（図10参照）。子育ては大変なことも多いが、やはり女性にとって母親になることは女性としての充実感を得られる大きな要素なのだろう。

４．大人自覚と自分らしさ

1995年の社会人調査は20歳代後半の若い社会人が対象で、「自分は大人だ」と自覚する人が男性で46.9％、女性で49.6％と半数に満たなかった。今回の社会人調査は50歳まで含む人々が調査対象者で、平均年齢は男性が34.7歳、女性が34.3歳と高くなっているので、大人自覚も高くなっているのではないかと予想していたが、男性で49.1％、女性で43.0％と、やはりともに半数に満たないという結果が出た。

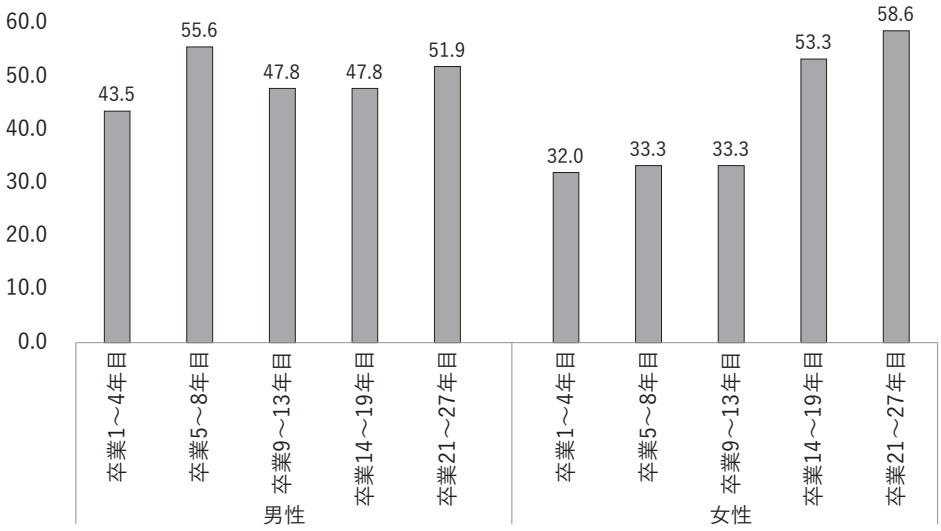

図11　大人自覚

2017年の大学生調査では、男子学生は29.5％、女子学生は19.9％しか「大人自覚」を持つ人はいなかったので、大学生に比べれば、さすがに大人自覚は高くなっていると言えるが、社会人になってからの大人自覚の高まりは単純ではない。

女性は30歳代前半までが３分の１程度に留まるのに対し30歳代後半と40歳代は５割を超えており、年齢上昇の効果が見られるが、男性の方はもっとも「大人自覚」が高いのは20歳代後半で30歳代は前半、後半ともに５割に届かず、40歳代も５割をほんのわずかに超えるだけで、年齢上昇の効果が見えない（図11参照）。

女性の場合、子を持ち母親になることが大人自覚を生み出すのではないかと思い、子を持っているか否かで比較してみたところ、確かに30歳代女性においては子を持つ女性の大人自覚は59.4％に対し、子を持たない女性では32.0％と有意な差が出るが、40歳代女性では52.0％と55.6％となり、子どもの有無は関連がなくなる。他方、男性では逆に30歳代では45.8％と42.1％とほとんど差がないのに対し、40歳代では57.1％と39.5％と有意な差が出てくる。これらを考え合わせると、親になるかどうかは大人自覚を持つことと関連がないわけではないが、それだけで決定的に決まるものでもないと言わざるをえない。

そもそも親になった人たちでも４割以上の人は、自分をまだ大人ではないと自覚しており、「大人」というものの定義が揺らいでいることをよく表していると言えよう。一般的に言えば、40歳代を大人ではないと見る人はほとんどいないのではないかと思うが、主観的には自分を大人と思えない人が４割以上いる時代であることは興味深い。20歳代後半の人々

を1995年調査と比較すると女性はかなり低くなり（49.6%→33.3%）、男性は高くなっている（46.9%→55.6%）わけだが、男性も前後の年齢層のデータを合わせて見るなら、25年前よりさらに「大人」概念は曖昧になり、大人自覚は持ちにくくなっていると結論付けた方がよさそうである。

この「大人自覚」と関連がありそうなのが、「自分らしさ」をつかめているかという質問に対する回答である。「はっきりつかめている」と「だいたいつかめている」を合わせた割合は女性の場合は年齢とともに確実に上昇していくのに対し、男性ではそういう変化は見られない。一番年齢の高い40歳代の男性は「自分らしさ」をつかめていると答える割合が20歳代前半に次いで低い（図12参照）。

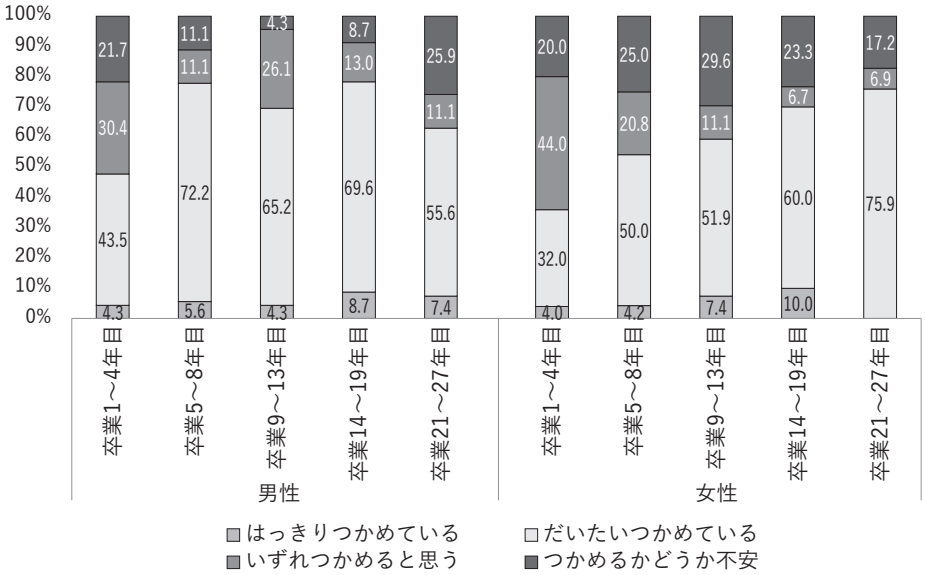

図12　自分らしさ

「男らしさ・女らしさ」が否定的に語られる時代の中で「自分らしさ」をつかむのは容易なことではなくなっている。それでも、女性たちは年齢が上がるに従って仕事と家庭のバランスを自分なりに確立し、自分らしさをつかむ人が増えていく。20歳代前半の若い女性社会人は2017年の大学生調査の世代だが、大学時代と比べて自分らしさをつかめている割合はほんのわずかしか増加していない（2017年調査の関大社会学部女子学生33.8%）のは、卒業して４年目あたりまではまだ人生設計を確定できず、大学時代とあまり変わらないのかもしれない。ただ、「今もつかめていないし、将来もつかめるかどうか不安だ」は33.8%か

ら20.0％に減り、「今はつかめていないが、いずれつかめると思う」が32.4％から44.0％に上がっているのは、学生時代よりは方向性が見えてきていると解釈することもできそうだ。

女性たちは仕事と結婚・出産などに関してどう折り合いをつけるかを就職活動の頃から考えなければならず、実際その選択をすることで「自分らしさ」をつかめたという実感を持てる可能性があるが、男性の場合は「自分らしさ」をどこでつかむのかは、今はかなり難しくなっている。高度経済成長期のように終身雇用が当たり前でその中で適宜出世していくことが男性の生きる道と単純に思えていた頃は、組織の中で自分のポジションを得て、その役割をきちんと果たせていれば、それで自分らしく生きられていると思えていた人が多かっただろうが、現在のように終身雇用も当たり前でなくなり[7]、仕事人間であることが称賛されず、「ワーク・ライフ・バランス」を取ることが求められるようになると、自分らしい生き方とはどの役割をどうこなすべきかの判断は難しくなってきており、女性のように年齢が高くなるほど、自分らしさをつかめていると答える人が単純に増えないという事態を生んでいるのかもしれない。

生き方の多様性が認められる中、様々な「らしさ」の基準が溶解し、「大人らしさ」も「自分らしさ」もつかむのが難しい時代になっていると言えよう。

5．ジェンダー観

次に性別役割分業等に関する考え方について見ていこう。「家事・育児の分担」に関しては年齢による差はそれほど明確に出ていないし、男女差に関しても20歳代前半の若い年代で差が大きいという結果が出ている程度である（図13参照）。

性にこだわらずに、家事・育児を平等に負担するという考え方はこの20年ほどの間に急速に広まってきた考えであり、どの年代でも平等化の方向に意識が変わってきているようだ。1995年の20歳代後半と今回の20歳代後半を比較すると、「公平に分担する」という選択肢を選ぶ人は、男性では15.1％から55.6％に、女性では38.0％から62.5％へと大きく増えている。

また、2017年の大学生調査でほぼ学生だった20歳代前半の層で公平分担を選択する者は、男性が学生時代の42.6％から52.2％へ、女性に至っては50.4％から80.0％へと大きく上昇

7）「転職はしない方がいい」という考え方を支持する人は、大学生調査においては４割以上いるのに対し、今回の社会人調査では20歳代男性で20％を少し超えるくらいで、30歳代以上の男性では２割に満たない。

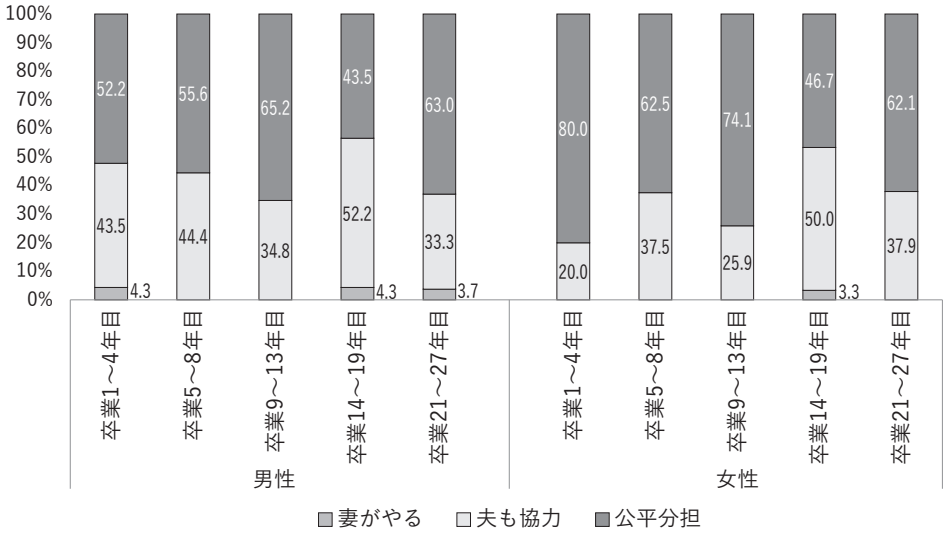

図13　家事・育児の分担

している。社会に出てからすぐに平等化意識は大きく増すようだ。

「既婚女性の仕事」に関しては、若い年代の方が「結婚して子どもが生まれても、できるだけ職業を持ち続けた方がよい」という選択をする人がやや少ないように見受けられる。女性に関しては20歳代後半以上に大きな差はないが、20歳代前半が７割強とやや低めで、男性に関しては30歳代前半以下の年齢層では３分の２以下、特に一番若い20歳代前半の男性では６割を切っている（図14参照）。

若い層で選択率がやや低いのではと指摘したが、それでも1995年調査と比べると大きく伸びている。1995年調査で「ずっと続けた方がいい」と答えた人は、男性では39.2%、女性では62.6%なので、同年齢層の20歳代後半はもちろん、その前後の年齢層と比べても、今回の方が選択率はかなり高くなっており、既婚女性が働くことを当然と捉える価値観は、この25年間で確実に広まったと言えるだろう。

他方、2017年調査の大学生で、本調査では20歳代前半層の若い社会人として調査対象者となった世代の意識変化を見てみると、男性は54.3%から56.5%に、女性は66.4%から72.0%とわずかな増加しか見られず、この面の意識変化は働き始めたからと言って急速に変わりはしないようである。

「結婚の際の名字選択」に関しては、20歳代後半の意識だけがやや異なるが、基本的には30歳代前半以下の若い年代の方が保守的な考えが強く、30歳代後半以上の年代の方が男女

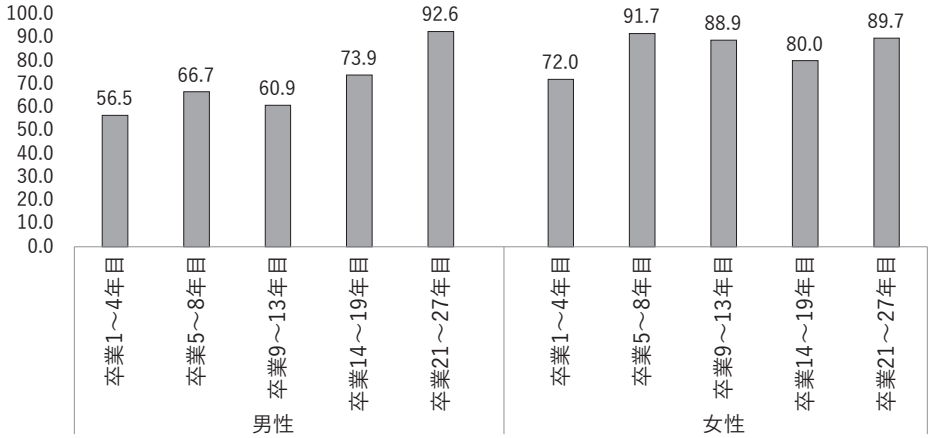

図14　既婚女性の仕事（「ずっと続けた方がいい」と思う人の割合）

平等志向が強く出ている。ただし、男性においては、「妻が夫の名字を名乗る」という保守的な考え方も３分の１以上おり、一概にこの点に関して男女平等志向の人が圧倒的に多いとは言えない（図15参照）。

1995年調査では、「夫の名字を名乗る」の選択率は、男性が49.3％、女性が30.3％であるので、今回調査の同年齢層（卒業５～８年目）と比べると、平等化は大きく進んだというこ

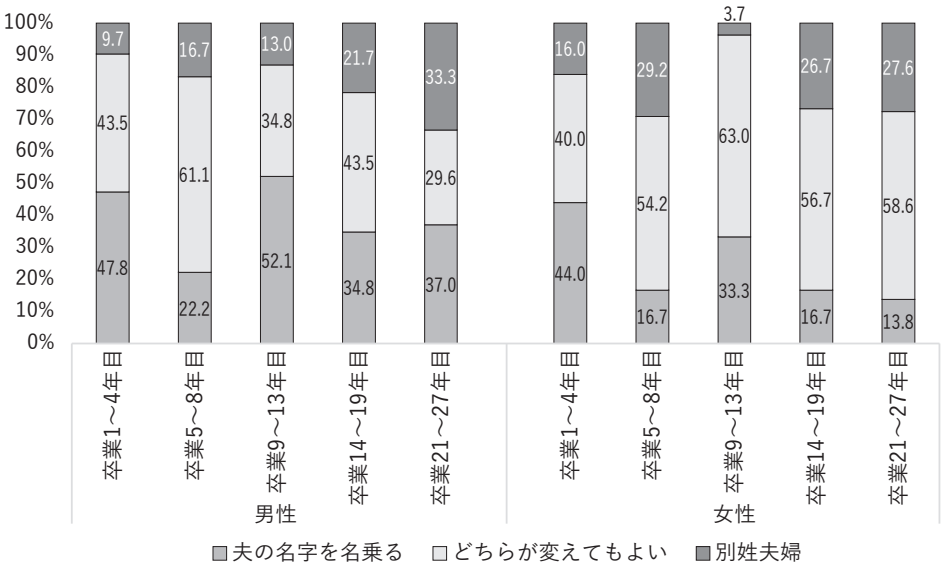

図15　結婚後の名字

とになるのだが、その前後の年齢層の選択率を見ると、夫婦の名字に関する考え方は25年で大きく平等化に向かって進行したとは言い難い。むしろ、「選択的夫婦別姓制度」は法制審議会が民法改正を答申した1996年頃の方が機運は盛り上がっていたので、その頃の若い社会人の方が、今の若い社会人より別姓夫婦を望む人が多かったということは十分ありそうなことである。1990年代の空気を知りその時代に価値観形成をしてきた30歳代後半以上の世代の方が別姓容認の意識を持ち続け、そういう機運が失われた後、価値観形成をしてきた30歳代前半以下の層でそうした意識が高まっていないのは当然と言えるかもしれない。

2017年調査時点での大学生だった20歳代前半の若い社会人の意識も大学時代に比べて変化しているとは言い難い。「夫の名字を名のる」は、男性が44.5％から47.8％に、女性では44.3％から44.0％となっており、働き始めたからと言って、この点に関する考え方はほぼ変わっていないようだ。

「男（女）らしさ」を必要と思うかどうかに関しては、年齢差も男女差もあまり見られず、60％台半ばから70％台前半くらいの人たちが必要だと答えている[8)]。しかし、1995年調査の若い社会人調査では男女合わせて84.1％の人が必要だと答えているので、時代変化を受けて必要性の認識は25年前と比べると減りつつあると言えよう。

他方、「男（女）らしい」と言われて嬉しいと思うかどうかに関しては、年齢による差が出ている。男女ともに40歳代が単純には嬉しいと思わない人が多く、30歳代後半も低めである。逆に30歳代前半より若い層では嬉しいと受け止める人が多めとなっている。これは、ジェンダーの捉え方云々というより、年齢が上がってくると、若い時ほど「男らしい」「女らしい」と言われることの価値がたいしてなくなってくるためかもしれない。男女差は、40歳代以外ははっきりと出ており、男性の方が単純に嬉しいと受け止める人が多い（図16参照）。

1995年の社会人調査では、嬉しいと答えるのは男性で65.2％、女性で36.3％である。男性は同年代である20歳代後半だけでなく、その前後の年代も視野に入れるとあまり変わりがないようだが、女性はむしろ1995年の頃の方が「女らしさ」への抵抗感が強かったようだ。

2017年大学生調査で「嬉しい」と答えた人は、男子学生は62.8％、女子学生は45.8％なので、この世代はむしろ社会に出てから、「男（女）らしい」と言われて嬉しいと思う人が増えていることになる。

ジェンダー観の変化についてまとめておくと、家事育児を分担することや女性が働くこ

8）30歳代後半の男性だけが91.3％と９割超えをしているが、たまたまの結果と見ざるをえない。

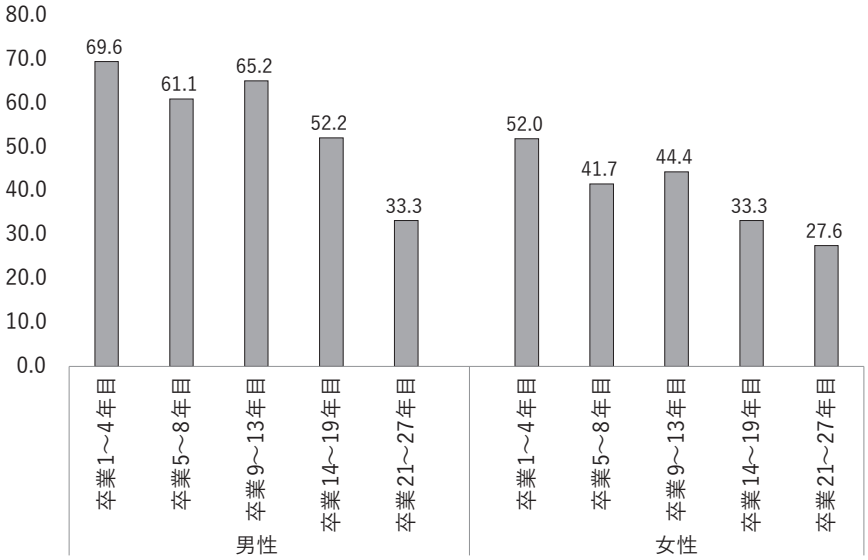

図16 「男（女）らしい」と言われて嬉しいと答える人の割合

とに関する理解は進んだし、「男（女）らしさ」が求められることへの疑問も増しているようだが、夫婦の名字に関して法制度改革が進まない現状を反映して、社会人においても、選択的夫婦別姓を支持する考え方は増えていないという状況のようだ。特に、年齢で比較すると、30歳代後半以上の年代の方が男女平等志向が強く、若い年代の方がやや弱いように見受けられる。

6．ネットの利用

ネットを利用した友人関係に関しては、年代差が明確に出るものとそうでないものがあるようだ。たいした用がないのに友人と連絡を取りあうことや、SNSで友人の近況を読んだりすることは若い人たちの方がまめに行っているが（図17、図18参照）、「いいね！」をつけたり、コメントを書いたりということになると、若い人たちの方がまめに行っているとは言えなくなるようだ（図19、図20参照）。

親しい友人とのLINE等での軽いやり取りや、読んだかどうか気づかれない形でのSNSのチェックは気楽にできても、「いいね！」をつけるとかコメントを書くという一歩踏み込んだ関わりとなると面倒だと思う若い人は増え、年齢差が無くなるようだ。ネット・コミュニケーション以前のコミュニケーション方式にもともと慣れていた上の世代では、ネッ

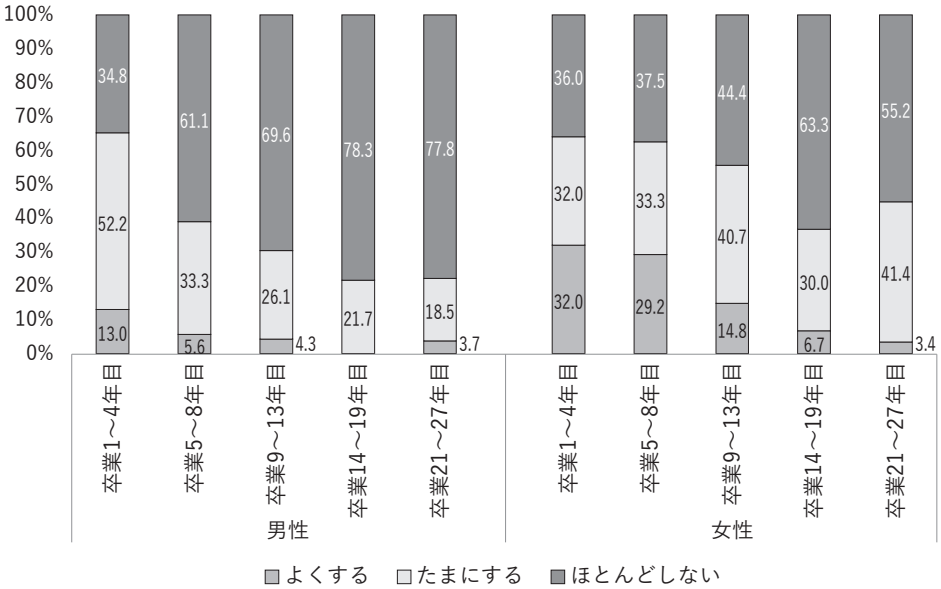

図17　たいした用もないのに、LINE 等でやりとりをする

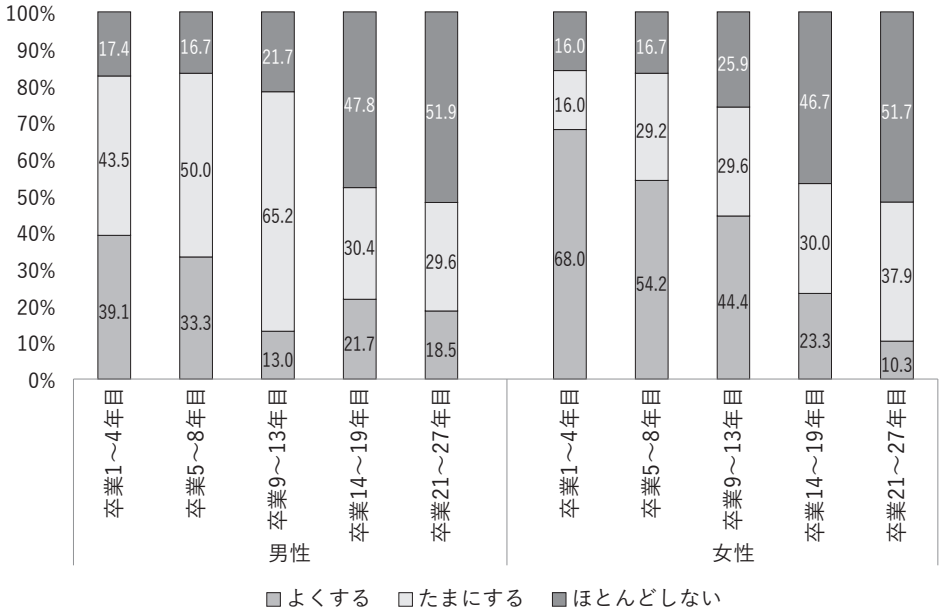

図18　SNS 等で友人の近況を読む

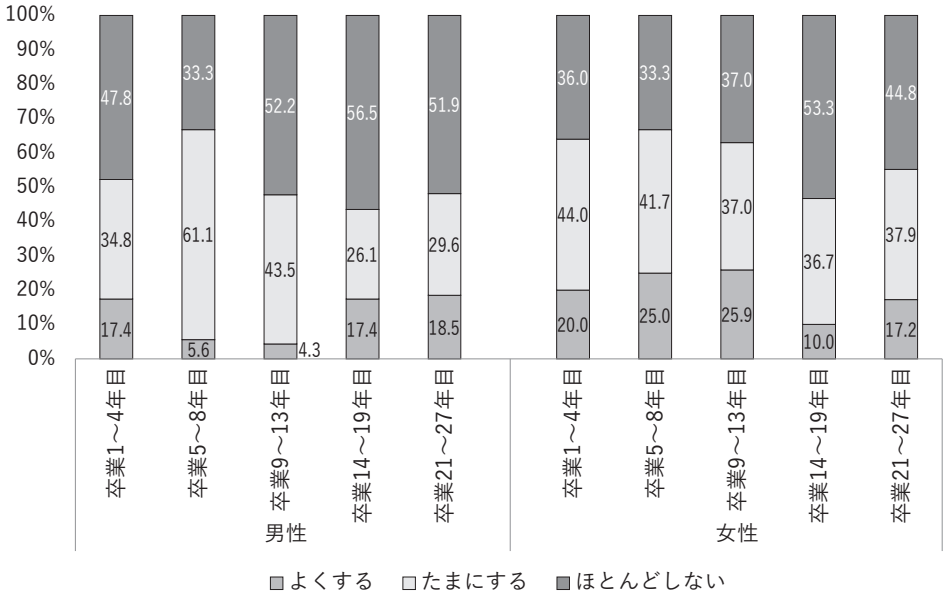

図19　友人のSNS等にいいね！をつける

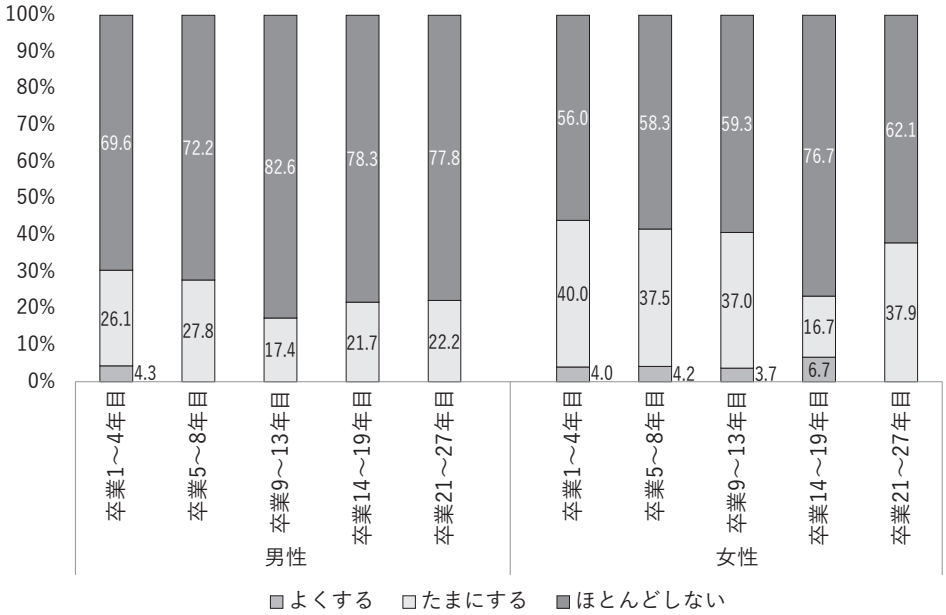

図20　友人のSNS等にコメントを書く

ト・コミュニケーションにおいてもなんらかのリアクションをするのが礼儀だと思う人が多いのに対し、若い世代ではSNS等ではリアクションしなくても礼儀を失したことにはならないというコミュニケーション・ルールが広まっているのだろう。

2017年調査時点で大学生だった20歳代前半の若い社会人を学生時代と比較してみると、上記の４項目すべてで「よくする」という人が大きく減っている。「LINEでのやりとり」をよくする人は男性が24.2％から13.0％へ、女性が43.7％から32.0％へ、「友人の近況」をよく読む人は、男性が54.7％から39.1％へ、女性が73.9％から68.0％へ、「いいね！」をよくつける人は、男性が45.3％から17.4％へ、女性が61.3％から20.0％へ、「コメント」をよく書く人は、男性が20.3％から4.3％へ、女性が22.5％から4.0％へ、といずれも大きく減っている。これは、やはり大学生と社会人では自由に使える時間が大きく減ってしまうことによるものだろう。

ネットを通しての友人付き合いに関しての男女差は、大学生においてもほとんどの項目で出ていたが、社会人でもある程度見られるようだ。「LINEでのやりとり」と「友人の近況を読む」に関しては明確に、「いいね」をつけると「コメントを書く」に関しては、年代によって差がなかったり、逆転していたりするところもあるが、総じて女性の方が多めであるとは言えるだろう。友人付き合いをまめにするという感覚は大学生だけでなく、社会に出てからも、やはり女性たちの方が強く持ち続けるようだ。

「面識のない人とネットを通して友人になれる」と答える人は、男性の20歳代前後半、女性の20歳代前半でわずかだが５割を超える（図21参照）。これは2017年調査の大学生（男子42.6％、女子43.0％）より多い。しかし、その他のグループはすべて2017年の大学生よりも「なれる」という人は少なく警戒感を持っているようだ。今回の調査の20歳代前半層はほぼ2017年調査時の大学生なので、社会に出てからさらに「なれる」という意識を増していることになる。しかし、2012年調査時点の大学生であった20歳代後半層では、男性は42.0％から50.0％へ上がっているが、女性は43.6％から29.2％へ大きく減らしている。さらに2007年時点の大学生だった30歳代前半層では、男性では38.1％から26.1％へ、女性も38.2％から14.8％へと大きく減少している。大学生調査でも徐々に「なれる」と答える学生が増えつつあり、社会人でも若い年代の方が「なれる」人は多いようだが、社会人になったからと言って、学生時代より「面識のない人とネットを通して友人になれる」という人が増えるとは単純には言えないようだ。

これは、スマホやSNS慣れの違いという、世代的な差かもしれないが、無理のない自然な新たな出会いの場があるかどうかの違いも影響していそうだ。大学生や社会に出たての

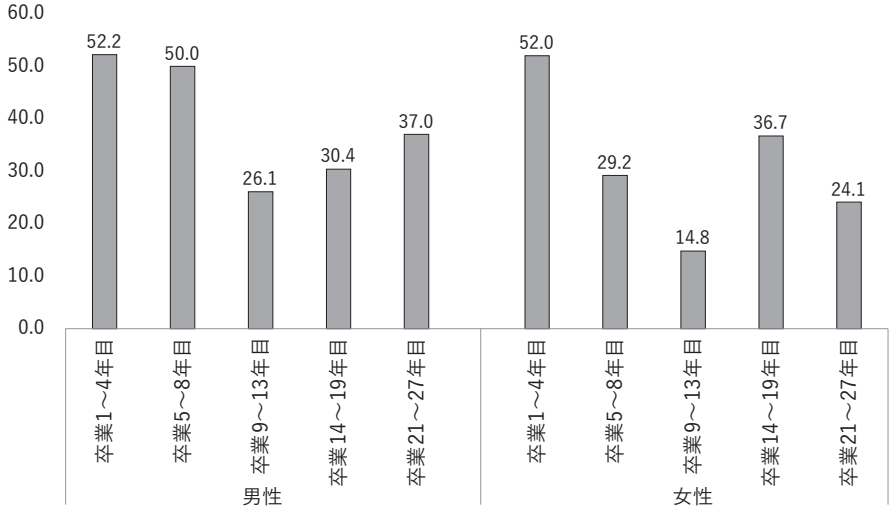

図21　面識のない人とネットを通して友人になれると答えた人の割合

人たちなら、まずネット上で同じ大学に入る人や、同じ会社に入る人と知り合い、その後面識を持つという出会いが多くあるが、社会人生活をある程度過ぎてからは、そういうネットで知り合った人と、その後自然な形で面識を持つということは減り、ネットで知り合った人とその後出会うとなると、様々な出会い系のアプリを利用したものが多くなってしまう。その結果、ネットで知り合う人と友人になることに対する警戒感が強まるのではないだろうか。

次にネットを利用してニュース等をチェックしているかという点について見てみよう。図22と図23を見てもらえばわかる通り、これはネット利用との親和性よりも、そもそも社会関心があるかどうかの方が強く影響していると言えるだろう。おそらく、ネット――特にスマホを通して――自体を利用している時間は年齢が低い人たちほど長いと予想できるが、スマホを使ってニュース・チェックをよくしているという人は男女ともに一番若い20歳代前半がかなり低めである。これは、ネット利用が社会関心の増加と単純には結びつかないことを示すわかりやすい証拠だろう。

しかし、20歳代後半の女性たちで９割を超える人がスマホでニュースをよくチェックすると答えているのを見ると、社会関心が少しでも高まれば、情報を得ようとする手段を持っていることは大きな武器になりうる可能性を感じさせる。実際、この社会人グループの中では一番低い20歳代前半層も、彼らが学生時代だった2017年調査でスマホでニュースをよくチェックすると答えたのは、男子で58.6％、女子で56.3％であり、女性に関しては伸

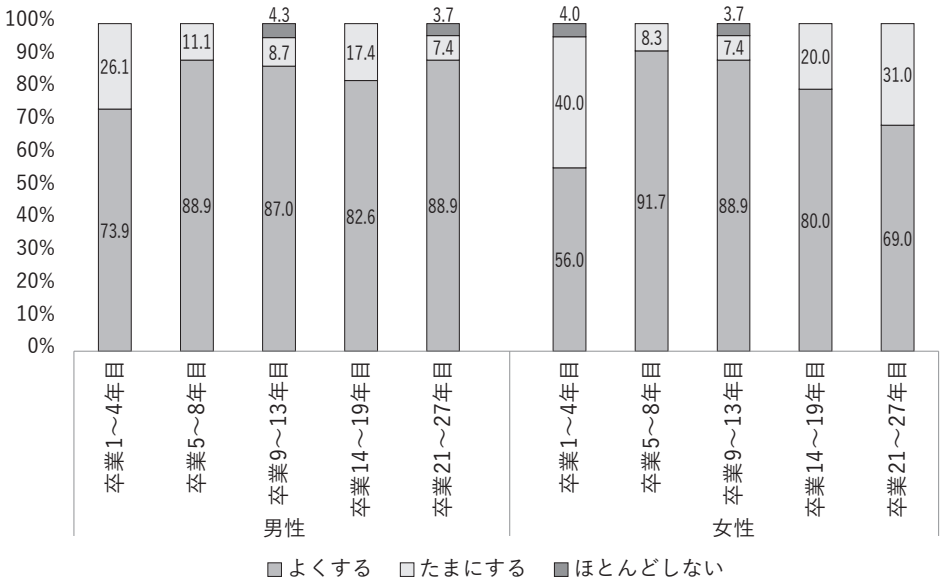

図22　スマホでのニュース・チェック

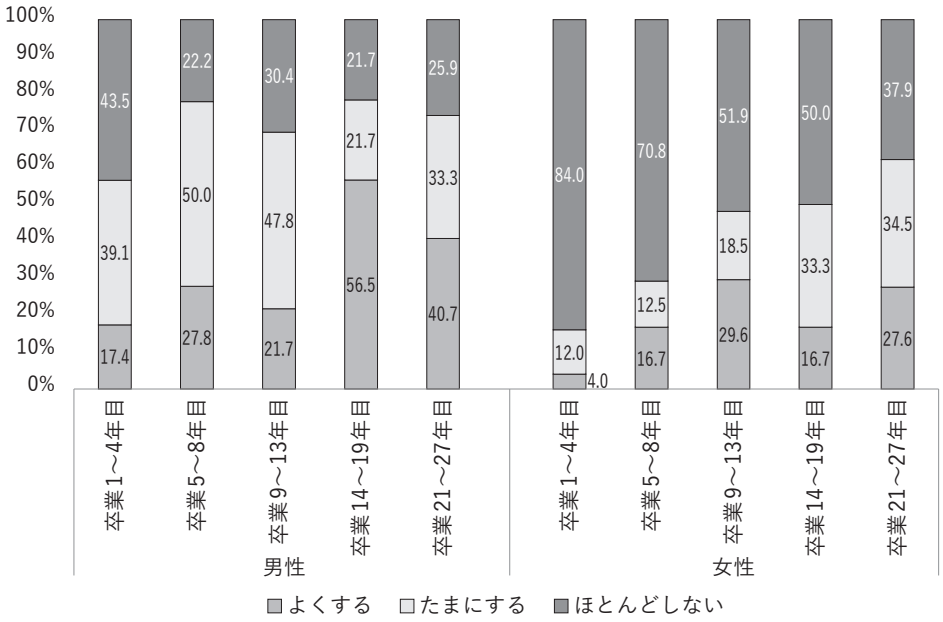

図23　パソコンでのニュース・チェック

びていないが、男性に関してはすでにかなり伸びていることが確認できる。働き始めて否が応でも社会関心を高めた時に、スマホで調べようと思ったらいろいろなことが調べられる便利さに改めて気付く人も多いことだろう。

同じネット情報であるパソコンでのニュース・チェックは、スマホ以上に社会関心の差が端的に表れていると言えよう。パソコンとなじんでいるかどうかということも影響しているのだろうが、基本的に年齢の高い層の方がパソコンでのニュース・チェックをよくしている。

2017年の関大社会学部生のうちパソコンでニュースのチェックをよくする人は、男子が18.0%、女子が13.4%だったのが、社会人になったその世代は、男性が17.4%、女性に至ってはわずか4.0%に減ってしまっている。若い世代のパソコン離れは、大学生よりも社会人の方が進んでしまうようだ[9)]。

7，政治意識

次に、政治意識について見てみよう。まず支持政党だが、図24に見られる通り、どの年代でも自民党支持がもっとも多い。特に、20歳代では男女とも半数以上が自民党を支持している。他にも40歳代の男性、30歳代の女性たちも半数以上が自民党支持である。半数に満たないのは、30歳代の男性たちと40歳代の女性たちであるが、かなり自民党に立場が近い、場合によっては自民党よりも保守的な日本維新の会への支持も合わせると、すべて過半数を超える。30歳代後半の男性たち以外のグループでは、その２つの政党への支持で３分の２を超えている。保守政党への支持が圧倒的となっているのが現状である。

2017年の大学生だった20歳代前半層を学生時代の意識と比較してみると、自民党支持に関してはそれほど大きく変化していない（男性64.1%→65.2%、女性53.6%→56.0%）が、維新への支持が伸びている（男性9.4%→26.1%、女性7.9%→12.0%）。この維新への支持は、この若い年代だけでなくどの年代でも高い。これは、今回の調査の時期に、新型コロナの感染が大きな社会問題となっており、その対応において、維新の会の副代表でもある吉村大阪府知事のパフォーマンスが、この調査を行っていた時期に高く評価されていたということが大きく影響していると言えよう。

9）もちろん、仕事上ではパソコンを使うのだろうが、プライベートの関心を充足するためにはもっぱらスマホを利用していると考えられる。

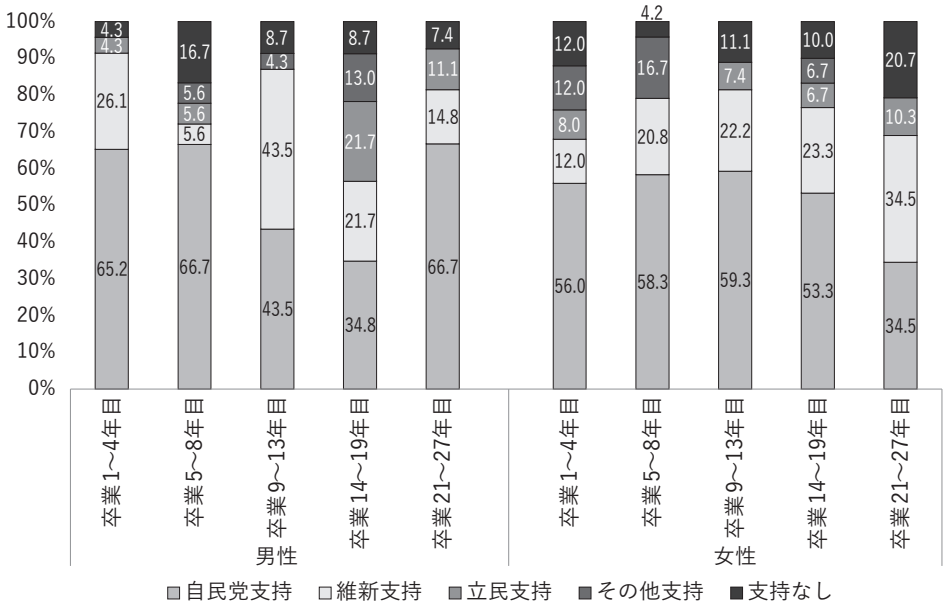

図24　支持政党

1995年の若い社会人調査と同年代である今回の20歳代後半層を比較してみると、この25年で政党支持に関する意識が大きく変わったことがくっきりと見て取れる。自民党支持が伸びたことはもちろんだが、支持政党はないと答える人が大きく減ったことがわかる（図25参照）。

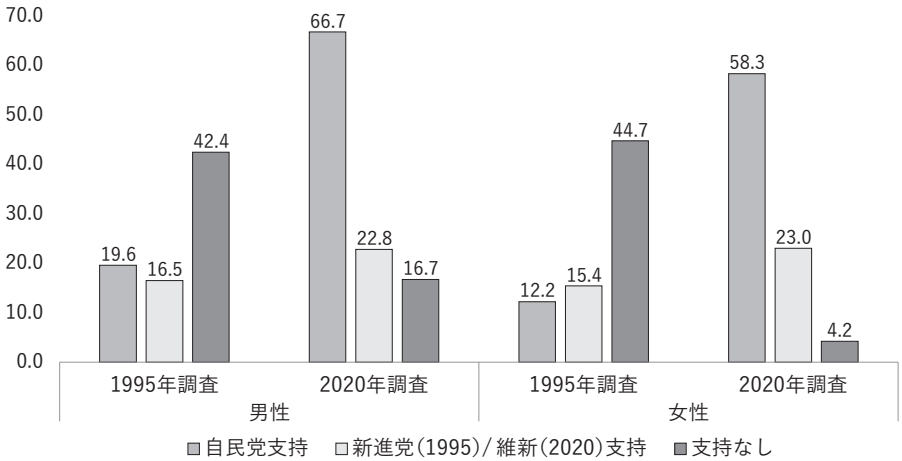

図25　1995年社会人調査との比較

小選挙区比例代表制による選挙がまだ１度も行われておらず[10]、選挙とは政党を選ぶという以上に政治家個人を選ぶものという認識が強かった時代は、政党そのものへの支持というのは今より比重が軽かった。しかし、小選挙区比例代表制による選挙が始まってからすでに20数年経った今、結局選挙とは政党を選ぶものだという認識が人々に浸透し、しいて問われれば、多くの人が支持政党は答えられるようになってきている。

次に各選挙に対する投票意欲から政治関心の程度について見てみよう。新型コロナ問題への対応で都道府県知事が目立っていた時期の調査でもあるので、知事選挙に関してはすべてのグループで４分３以上の人が投票に行くと答えているが、大学生の調査で知事選挙と変わらないくらい投票意欲があるという回答が多かった市町村長選挙に関しては、30歳代前半の男性では５割を切り、女性も20歳代は前半後半ともに７割を切っている。また、国の政治を決めるもっとも重要な選挙である衆議院選挙に関しても、男性では20歳代前半が７割を切り、30歳代前半も７割をわずかに超える程度である。女性では20歳代後半世代が約７割、30歳代前半は３分の２で、一番若い20歳代前半では５割を切っている。

表２　投票意欲

		市町村長	市町村議会	都道府県知事	都道府県議会	参議院	衆議院
男性	卒業１～４年目	73.9	52.2	78.3	43.5	60.9	69.6
	卒業５～８年目	72.2	44.4	94.4	50.0	77.8	83.3
	卒業９～13年目	43.5	26.1	78.3	30.4	56.5	73.9
	卒業14～19年目	73.9	56.5	87.0	60.9	78.3	91.3
	卒業21～27年目	81.5	66.7	88.9	63.0	96.3	96.3
女性	卒業１～４年目	60.0	44.0	92.0	28.0	44.0	44.0
	卒業５～８年目	66.7	45.8	87.5	41.7	70.8	70.8
	卒業９～13年目	74.1	55.6	96.3	55.6	66.7	66.7
	卒業14～19年目	100.0	63.3	100.0	63.3	90.0	96.7
	卒業21～27年目	96.6	55.2	96.6	62.1	75.9	86.2

全体としてみると、投票意欲に関しては、男女とも30歳代半ばを境に、大きく違いが出ており、30歳代後半以上の世代で投票意欲が高い。40歳代は1992年調査や1997年調査時の大学生で、30歳代後半は2002年調査時の大学生の世代だが、その頃の大学生の投票意欲が高かったかというと決してそんなことはない。ということは、年齢を増し、それなりに長

10）小選挙区比例代表制による初の衆議院選挙は1996年10月21日に行われた。

く政治を見てきたことで関心が高まってきたということになるのだろう。

表３　投票意欲（2017年大学生との比較）

		市町村長	市町村議会	都道府県知事	都道府県議会	参議院	衆議院
2017年	関大男子	59.7	38.0	71.3	41.9	41.9	62.0
2020年	20歳代前半男性	73.9	52.2	78.3	43.5	60.9	69.6
2017年	関大女子	68.3	48.6	71.8	47.9	47.9	59.9
2020年	20歳代前半女性	60.0	44.0	92.0	28.0	44.0	44.0

ちなみに、表３に見られるように、2017年調査時の大学生だった20歳代前半の若い社会人の場合は、男性ではすべての選挙に関して大学時代より意欲を増しているが、女性の場合は知事選挙以外はすべて意欲を減らしている。卒業して数年ではまだ政治関心は高まるとは言えないようだ。

表４　投票意欲（1995年社会人調査との比較）

		市町村長	市町村議会	都道府県知事	都道府県議会	参議院	衆議院
1995年	20歳代後半男性	59.8	51.8	68.9	48.8	54.9	68.9
2020年	20歳代後半男性	72.2	44.4	94.4	50.0	77.8	83.3
1995年	20歳代後半女性	69.4	52.4	65.3	43.5	54.9	62.9
2020年	20歳代後半女性	66.7	45.8	87.5	41.7	70.8	70.8

表４は、1995年調査との比較である。同年齢層を比較してみると、総じて今回の方が投票意欲は高くなっているようだ。1995年頃は政党の離合集散が激しく政治不信が強かった時代だったので、その時と比べると、ちゃんと選挙には行くべきだという考えを持つ者は増えている。ただし、この投票意欲の高まりが、政治や政策に対する関心の高まりというよりは、知事選に対する意欲の大幅な高まりに見られるように、「スター」や「ドラマ」に対する関心の高まり、あるいは「とりあえず投票には行くべき」というルール順守の考えに基づくものである可能性は小さくないように思われる。

今後自衛隊をどうすべきかについては、男女差が大きい。男性はどの年代でも「増強すべき」を選択する人が３分の１以上おり、30歳代前半層においては半数以上が増強を求める。他方、女性においては増強を求めるのはもっと多い30歳代前半でも２割に満たない。しかし、「縮小すべき」か「なくすべき」を選ぶ人は女性でもごくわずかしかおらず、「現状維持」ということで自衛隊を肯定的に捉えている（図26参照）。

1995年の社会人調査と比較しても自衛隊に対する肯定度がおおいに増していることが確認できる。男性の場合は、増強も含めた積極的肯定が、女性は現状維持という形での消極的肯定という違いはあるが、この25年の間に生じた様々な状況変化[11]の影響を受け、自衛隊に対する見方は大きく変化したのは明らかである。

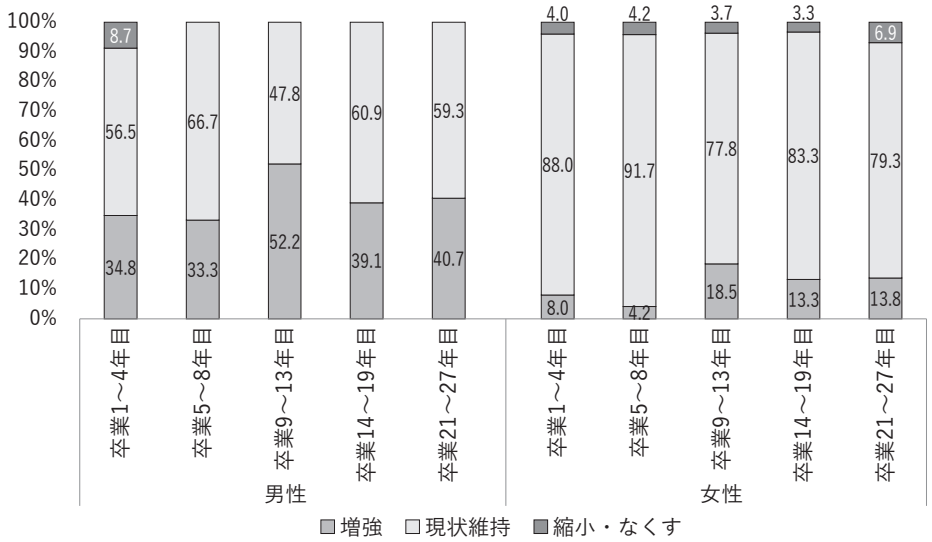

図26　今後の自衛隊について

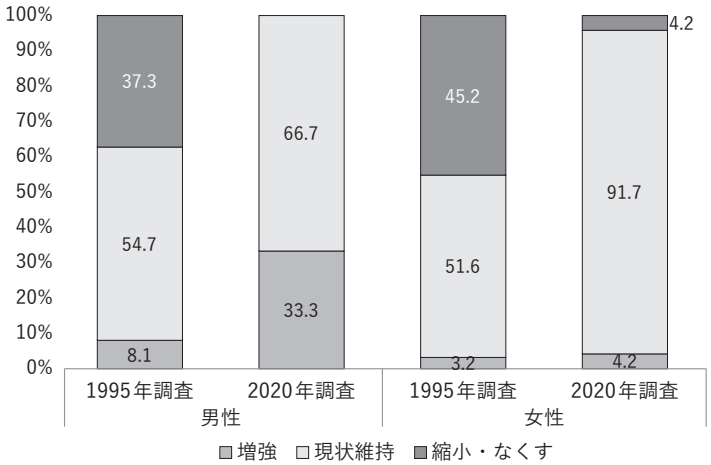

図27　今後の自衛隊について（1995年社会人調査との比較）

11）自衛隊に対するイメージが変わり始めたのは、まさに1995年の阪神淡路大震災とオウム事件からであり、その後PKOによる海外派遣、毎年のように起きる災害での救助活動、そして最近では近隣諸国との領土問題等もあり、自衛隊の必要性、重要性を感じる国民は増えている。

8．求める社会

求める「理想の社会」の姿は、年齢による差が出ているように見える。男女とも総じて年齢が上の人たちの方が「福祉社会」をよいとするものが多い（図28参照）。これは大学生調査の推移でも「福祉社会」を選ぶ人が徐々に減ってきているという傾向と軌を一にした結果だろう。21世紀に入ってから、日本の年金制度の信頼性が急速に薄れ、若い人たちは将来自分たちがちゃんと年金をもらえるのかどうか疑わしく思っている。そして、それは制度をいじることで簡単に修正できることではなく、日本社会の構造的な問題だと漠然とながらも気づいている。そのことが、今回の調査でも表れ、福祉社会を選択する人が若い年代に少ないという結果になっているのだろう。当然ながら、1995年の社会人と比べても、「福祉社会」の選択率が落ちていることが確認される（「福祉社会」の選択率：男性71.9%→61.1%、女性66.1%→37.5%）。

男女差に関しては、大学生調査でも同じ傾向が見られるが、福祉社会を選ばない人たちが競争社会と統制社会のどちらを選ぶかというと、男性は競争社会を、女性は統制社会を選ぶ傾向にある。自己努力で豊かになれるという意識は伝統的ジェンダー観に基づくと男性の方で多く生まれやすいものだが、その傾向は若い年代の方に顕著に出ていて、30歳代以上の年代ではあまり差はないようだ。ここでも、若い年代の方に保守化の傾向が見られ

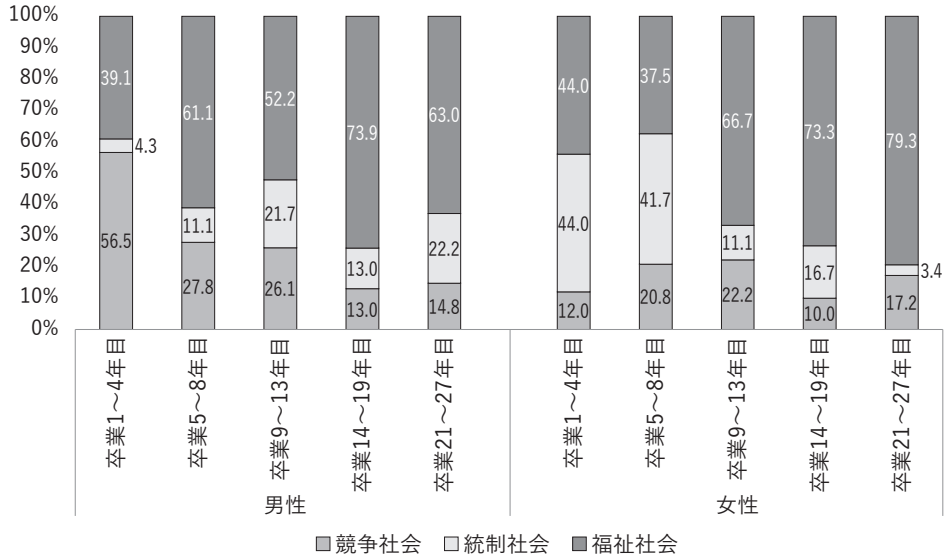

図28　理想の社会

るようだ。

日本がもっと経済的発展をすべきかということに関しては賛成と答える人が全体に多くなっている。男性では、すべての年代で７割以上が発展すべきと考えており、女性でも40歳代以外は７割を超えている（図29参照）。1995年の社会人調査の際には、男性で54.3％、女性では30.1％しかいなかったのと比べると大きな変化である。1995年はバブル経済はすでに終わっていたが、バブル経済時代の日本の浮かれたような株高、地価高、そして海外からのジャパン・バッシングをみんな覚えていたので、ああいう状態に再びなることがいいこととは思えなかったのだろう。しかし、そこから25年。30歳代以下の層、特に20歳代以下の若い社会人は景気の良かった時代をまったく経験せずに来ている。それゆえ、若い人たちの間で日本の経済発展を望む人が多いのは当然と言えよう。

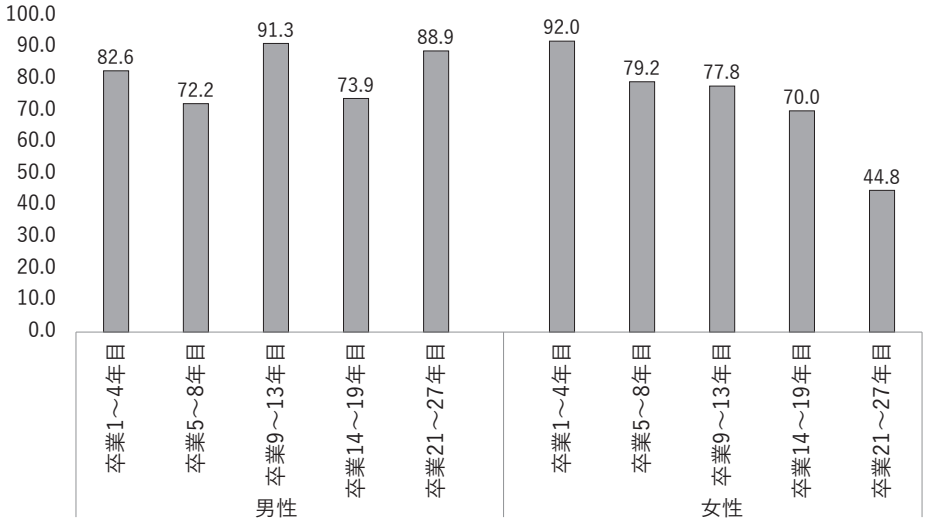

図29　日本はもっと経済発展をすべきと思う人

40歳代は男女で大きく意識が異なる。男性の方は88.9％とかなり高い割合の人が経済発展を望むが、女性は44.8％しか望む人がいない。この差は調査対象者になっている人たちの生活満足度も影響しているかもしれない。40歳代男性グループで現在の生活に満足していると答える人は81.5％で男性５グループの中で一番低いのに対し、40歳代女性グループでは100％が満足と答えている。男女合わせてだが、生活に満足していると答えた人で経済的発展を求める人は75.6％に対し、満足していないと答える人では89.3％もいる。大学生の場合、現在の生活への不満は経済問題と必ずしも直結しないことも多いが、経済的に自

立していなければならない年齢になった社会人の場合、経済状況が生活満足度と結びつきやすいのではないだろうか。

おわりに

以上見てきたように、いろいろ興味深い結果を得られた調査だったが、年齢層が幅広く男女各５グループ、全体で10グループに分けての分析となり、各グループに属する人数がそれほど多くはなかった――最小の第４世代（20歳代後半）男性は18名――ために、数人の回答傾向で比率が大きく変わってしまうこともあり、この結果をもって、社会人の傾向性を十分把握できたかと言えば、とうていそうは言えないだろう。また調査対象者も基本的に、私のゼミの卒業生がほとんどなので、その偏りも考慮にいれなければならない。たとえば、生活目標で「その日その日を自由に楽しく過ごす」という選択をするものが大学生だけなく一般の人々と比べてもかなり少ないのは、まじめな卒業生が多い私のゼミ生の特徴が出ているかもしれない。

しかし、そうした制約を差し引いても、年齢による違いや時代による違い、そして大学生との違いがいくつも明らかになった。年齢による違いはいろいろ表れているが、大きく見ると、30歳代半ばがひとつの区切りのようになっているものが多かった。30歳代後半以上の意識と、30歳代前半以下の意識が異なることが多かったように思う。これは世代の違いによるものか、はたまた年齢を経たことによる違いなのか。前者も多少あるだろうが、やはり後者の要素が強い気がする。特に女性で年齢差がわりと出ているのは、結婚し子を持ち、家庭の中心になることにより、若い時とは異なる意識が生まれやすいからなのではないだろうか。

時代の影響はどの年齢層にもある程度同じように作用する。自民党支持の増大や自衛隊に対する肯定的意識の高まりなどはまさに時代の影響だろう。ただ、そんな中でも40歳代女性たちで自民党支持が相対的に少なかったりするのは、1990年代のふがいない自民党の印象がまだ鮮明に残っているせいかもしれない。ただし、同じ40歳代でも男性では十分自民党支持が高いので、一概に世代効果が残るというわけでもないようだ。

ネットの利用などもすべての年代に影響をしている。しかし、細かく見ると、利用の仕方には世代によって微妙な違いが出ているようだ。学生時代にまだ携帯電話もなかった、あるいはようやく使い始めた40歳代世代と大学時代あるいはそれ以前からスマホを利用してきた20歳代以下の世代とでは、利用の仕方が微妙に異なる。人間関係も若い世代では、

よりスマホ・SNS的な軽いコミュニケーション・ルールに従っているのに対し、上の世代ではスマホ・SNS以前のより丁寧なコミュニケーション・ルールに従っているように見える。

宅配新聞に関しては30歳代前半が男女合わせて4.0％しか取っておらず、もっとも低い。この年代より若い層はまだ親とともに住んでいる人が多いため、この年代より宅配新聞を取っていると答える人が多い（20歳代後半31.0％、20歳代前半20.8％）が、上の年代は自分自身で取っている人が多いはずだが、30歳代後半が28.3％、40歳代が55.4％である。この数字を見ると、ニュースの取り入れ方も30歳代半ばより下ではスマホ頼りになっていると考えられる。

25年前の社会人調査と比べると、時代変化は多くの面で表れている。上述の支持政党や自衛隊への意識ももちろんだが、ジェンダー関連の意識も変わっている部分が多い。ただし、すべて男女平等化に向かって意識が進んでいるかと言うと、必ずしもそう言いがたいものもある。夫婦の名字をどうするかという問いに対する選択などは進んでいるとはとうてい言えない。他方で、女性が働くことや家事育児を分担すること、「男（女）らしさ」の価値の低減などは確実に表れている変化と言えよう。

学生時代と比べての変化としては、大人自覚や仕事観や政治関心などが変わってきていることが指摘できる。大人自覚に関しては、働き始めることで確実に大学生よりは高くなるが、そのまま年齢とともに大人自覚を持つものが増えるという変化にはなっていない。

仕事観に関しては、20歳代――特に20歳代前半――では大学生時代に想像していた時より実際の仕事の方がよりしんどいようで、「仕事派」が減り、「余暇派」が増えている。しかし、30歳代になると、特に男性を中心に「仕事派」が大学生より増えてくるという変化が見えている。

他方、政治関心に関しては、投票意欲が30歳代後半から目に見えて高くなっている。政治は大学生になってから関心を持つ人が多いので、そこから適度に関心を持ち続け10年以上も経つと、政治についていろいろなことがわかってきて面白くも思えるようになるものだ。ただ、30歳代前半の男性たちの投票意欲の低さなどを見ると、必ずしも年齢が上がれば投票意欲も上がるということでもないのかもしれない。

大学生時代と大きな違いを見せるものに、一番大切なものという質問の回答もある。「家族・友人・人間関係」を選んだ2017年調査の関大生は38.4％だが、本調査の社会人は63.7％である。もちろん、これも年齢との関連が強く、まだ社会に出たての20歳代前半層は大学生と大きく変わらないが、20歳代後半以上の年代では、この回答が非常に増えてくる。

特に、結婚し家庭をもった人たちは、何よりも「家族」を一番大切なものとしてあげる。大学生でも、家族と書く人は少なくないが、自分が子どもとして位置付けられる家族と、自分自身が創った家族では思い入れは大きく異なる。結果として、既婚社会人の４分３が「家族・子ども・パートナー」と書いている。

25年ぶりの社会人調査だったが、前回と違い、幅広い年齢層の対象者を含むものとなったために、時代の変化もさることながら、同じ社会人と言ってもかなり異なる価値観を持っている人がいることがより強調されることになったかもしれない。今回の年代による違いが加齢によって起きる差なのか、世代による差なのかを検証するためには、10年後に同じ調査対象者でパネル調査をするといろいろなことが明らかになりそうである。調査対象者は私のゼミの卒業生なのでパネル調査で追いかけることは可能なので、10年後にまだ気力があれば試みてみたいと思う。

―2021.5.31受稿―

＜付録：調査票（単純集計結果付）＞

現代人の価値観（Google formでの調査）　2020年10月

まず、あなた自身のことについてお教え下さい。

Q１　年齢（2020年10月１日時点）　22～24歳　30（12.0%）　25～29歳　51（20.5%）
30～34歳　47（18.9%）　35～39歳　53（21.3%）
40～44歳　21（ 8.4%）　45～50歳　47（18.9%）

Q２　性別　男性　114（45.8%）　女性　135（54.2%）

Q３　大学入学年　1990～1995年　56（22.5%）　1998～2003年　53（21.3%）
2004～2008年　51（20.5%）　2009～2012年　43（17.3%）
2013～2016年　46（18.5%）

Q４　大学卒業年　1994～2000年　56（22.5%）　2002～2007年　53（21.3%）
2008～2012年　50（20.1%）　2013～2016年　42（16.9%）
2017～2020年　48（19.3%）

Q５　あなたは現在配偶者がおられますか。
１．いる　142（57.0%）　２．いない　107（43.0%）

Q６　お子さんはいらっしゃいますか。
１．いる　106（42.6%）　２．いない　143（57.4%）

Q７　お子さんのおられる方は、何人いて、何年生か（就学前や卒業後の場合は年齢）をお教えください。
０人　143（57.4%）　１人　42（16.9%）　２人　53（21.3%）
３人　10（ 4.0%）　４人　1（ 0.4%）　【年齢は省略】

Q８　あなたの働き方は次のいずれにあたりますか。
１．フルタイムの正規雇用者（定年まで勤務可）　195（78.3%）
２．フルタイムの正規雇用者（任期付き）　8（ 3.2%）
３．非正規雇用者（時給制等雇用者）　15（ 6.0%）
４．自営業　7（ 2.8%）
５．無職（専業主婦を含む）　18（ 7.2%）
６．その他　6（ 2.4%）

Q９　あなたは大学時代、授業にはよく出席した方ですか。

１．よく出席した	140（56.2%）	２．まあまあ出席した	83（33.3%）
３．あまり出席しなかった	23（ 9.2%）	４．ほとんど出席しなかった	3（ 1.2%）

Q10　友人関係についてお伺いします。あなたには、現在、親友と呼べる友達が何人ぐらいいますか。

０人	15（ 6.0%）	１人	20（ 8.0%）	２人	44（17.7%）
３人	57（22.9%）	４人	15（ 6.0%）	５人	50（20.1%）
６～９人	24（ 9.6%）	10人	13（ 5.2%）	11～30人	5（ 2.0%）
				DK.NA.	6（ 2.4%）

Q11　面識のない人と携帯（スマホ）やパソコンを通して友だちになることはできますか。

１．できる　86（34.5%）　　２．できない　163（65.5%）

Q12　たいした用もないのに、LINE 等で友人と何度もやりとりをよくしますか。

１．よくする	28（11.2%）
２．たまにする	82（32.9%）
３．ほとんどしない	139（55.8%）

Q13　SNS 等で友人の近況をよく読みますか。

１．よくする	80（32.1%）
２．たまにする	88（35.3%）
３．ほとんどしない	81（32.5%）

Q14　SNS 等で「いいね！」をよくつけますか。

１．よくする	41（16.5%）
２．たまにする	96（38.6%）
３．ほとんどしない	112（45.0%）

Q15　SNS 等でコメントをよく書きますか。

１．よくする	6（ 2.4%）
２．たまにする	71（28.5%）
３．ほとんどしない	162（65.1%）

Q16　自分の SNS をよく更新しますか。

１．よくする	22（ 8.8%）
２．たまにする	65（26.1%）
３．ほとんどしない	162（65.1%）

Q17　ネットに匿名で書き込みをよくしますか。

1．よくする	2	(0.8%)
2．たまにする	12	(4.8%)
3．ほとんどしない	235	(94.4%)

Q18　携帯（スマホ）でニュースをよく見ますか。

1．よくする	200	(80.3%)
2．たまにする	45	(18.1%)
3．ほとんどしない	4	(1.6%)

Q19　パソコンでニュースをよくチェックしますか。

1．よくする	64	(25.7%)
2．たまにする	74	(29.7%)
3．ほとんどしない	111	(44.6%)

Q20　次に、男性観・女性観をお伺いします。まず、もしも、もう一度生まれ変われるとしたら、あなたは、男と女のどちらに生まれてきたいですか。

1．男　127（51.0%）　　2．女　122（49.0%）

Q21　デートの際にかかった費用は、何割を男性が負担すべきだと思いますか。

0割	2	(0.8%)	5割	74	(29.7%)	5.5割	1	(0.4%)
6割	38	(15.3%)	6.5割	2	(0.8%)	6.6割	1	(0.4%)
7割	58	(23.3%)	8割	34	(13.7%)	8.5割	1	(0.4%)
9割	6	(2.4%)	10割	32	(12.9%)			

Q22　あなたは、「男らしいね」と言われたら、嬉しいですか。[男性の方へ]
あなたは、「女らしいね」と言われたら、嬉しいですか。[女性の方へ]

1．はい　116（46.6%）　　2．いいえ　17（ 6.8%）
3．一概には言えない　116（46.6%）

Q23「男らしさ」や「女らしさ」は必要だと思いますか。

1．絶対必要である。	23	(9.2%)
2．どちらかといえば必要である。	155	(62.2%)
3．どちらかといえば必要ではない。	52	(20.9%)
4．まったく必要ではない。	19	(7.6%)

Q24　一般に結婚した男女は、名字をどのようにしたらよいとお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

１．当然、妻が名字を改めて、夫の方の名字を名のるべきだ。　6（ 2.4%）
２．現状では、妻が名字を改めて、夫の方の名字を名のった方がよい。　72（28.9%）
３．夫婦は同じ名字を名のるべきだが、どちらが名字を改めてもよい。　121（48.6%）
４．わざわざ一方に合わせる必要はなく、夫と妻は別々の名字のままでよい。　50（20.1%）

Q25　結婚した女性が職業を持ち続けることについて、どうお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

１．結婚したら、家庭を守ることに専念した方がよい。　6（ 2.4%）
２．結婚しても子どもができるまでは、職業を持っていた方がよい。　48（19.3%）
３．結婚して子どもが生まれても、できるだけ職業を持ち続けた方がよい。　195（78.3%）

Q26　家事や育児を夫婦はどのように分担すべきだと思いますか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

１．本来女性の方が向いているので、妻がやった方がよい。　4（ 1.6%）
２．どちらかといえば女性の方が向いているとは思うが、夫もできるだけ協力すべきだ。　94（37.8%）
３．どちらの方が向いているかなどとは言えないので、公平に分担すべきだ。　151（60.6%）

Q27　結婚していない若い人たちの男女関係について、どのようにお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

１．結婚式がすむまでは、性的交渉（セックス）をすべきではない。　3（ 1.2%）
２．結婚の約束をした間柄なら、性的交渉があってもよい。　4（ 1.6%）
３．深く愛し合っている男女なら、性的交渉があってもよい。　51（20.5%）
４．つきあっていれば、性的交渉があってもよい。　127（51.0%）
５．性的交渉をもつのに、結婚とか愛とかは関係ない。　64（25.7%）

以下、さまざまな意見や考え方について伺わせていただきます。

Q28　あなたは現在の生活にどの程度満足していますか。

1．かなり満足している　45（18.1%）
2．どちらかといえば満足している　176（70.7%）
3．どちらかといえば不満だ　24（ 9.6%）
4．かなり不満だ　4（ 1.6%）

Q29　ここに二つの人生観があります。しいていえば、あなたのお考えはどちらに近いですか。

1．人生は要するに闘争だ。他人との競争に打ち勝っていかなければ何事もできない。　72（28.9%）
2．他人と争うのはよくない。何事も丸くおさめて自然のなりゆきに従っていくのが賢いやり方だ。　177（71.1%）

Q30　人によって生活の目標もいろいろですが、以下のように分けると、あなたの生活目標にいちばん近いのはどれですか。

1．その日その日を、自由に楽しく過ごす。　25（10.0%）
2．しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く。　83（33.3%）
3．身近な人たちと、なごやかな毎日を送る。　128（51.4%）
4．みんなと力を合わせて、世の中をよくする。　13（ 5.2%）

Q31　あなたは、どのように生きたら、自分らしく生きられるか、つかめていますか。

1．はっきりつかめている。　14（ 5.6%）
2．だいたいつかめている。　143（57.4%）
3．今はつかめていないが、いずれつかめると思う。　44（17.7%）
4．今もつかめていないし、将来もつかめるかどうか不安だ。　48（19.3%）

Q32　将来のために、若い頃の苦労は買ってでもした方がよいと思いますか。

1．そう思う　190（76.3%）　2．そう思わない　59（23.7%）

Q33　自分はおとなだと思いますか。

1．そう思う　114（45.8%）　2．そう思わない　135（54.2%）

Q34　転職はなるべくすべきではないと思いますか。

1．そう思う　39（15.7%）　2．そう思わない　210（84.3%）

Q35　ある程度の収入さえ得られるなら、出世するより気楽な地位にいる方がよいと思いますか。

1．そう思う　169（67.9%）　2．そう思わない　80（32.1%）

Q36　働かないでも楽に暮らしていけるだけのお金があれば、遊んで暮らしたいと思いますか。

１．そう思う　111（44.6%）　　２．そう思わない　138（55.4%）

Q37　あなたは就職したら、仕事と余暇のバランスをどのようにとっていきたいとお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

１．仕事よりも、余暇に生きがいを求める。　16（ 6.4%）
２．仕事はさっさとかたづけて、できるだけ余暇を楽しむようにする。　69（27.7%）
３．仕事にも余暇にも同じぐらい力をいれる。　122（49.0%）
４．余暇も時には楽しむが、仕事の方に力を注ぐ。　40（16.1%）
５．仕事に生きがいを求めて、全力を傾ける。　2（ 0.8%）

Q38　ある会社に次のような二人の課長がいるとします。もしあなたが使われるとしたら、どちらの課長がよいですか。

１．規則をまげてまで、無理な仕事をさせることはありませんが、仕事以外のことでは人のめんどうをみません。　117（47.0%）
２．時には規則をまげて、無理な仕事をさせることもありますが、仕事のこと以外でも人のめんどうをよくみます。　132（53.0%）

Q39　次に、社会関心等についてお伺いします。まずお宅では宅配の新聞をとっていますか。

１．はい　71（28.5%）　　２．いいえ　178（71.5%）

Q40　原子力発電所について、あなたのお考えは以下のどれに近いですか。

１．新設も含めて積極的に利用していく。　4（ 1.6%）
２．安全基準を明確にして安全確認のされたものは継続的に利用していく。　142（57.0%）
３．最小限度の利用にとどめ、近い将来には利用をやめる。　100（40.2%）
４．いますぐ一切の利用をやめる。　3（ 1.2%）

Q41　あなたは、次にあげるどの選挙なら投票に行こうと思いますか。行こうと思うものにすべて○をして下さい。

１．市町村長　188（75.5%）
２．市町村議会　129（51.8%）
３．都道府県知事　225（90.4%）
４．都道府県議会　126（50.6%）
５．参議院　180（72.3%）
６．衆議院　195（78.3%）

Q42　あなたは、どの政党を支持していますか。ひとつ選んでください。

1.	自民党	64（25.7%）
2.	立憲民主党	7（ 2.8%）
3.	公明党	0（ 0.0%）
4.	日本維新の会	21（ 8.4%）
5.	共産党	3（ 1.2%）
6.	国民民主党	0（ 0.0%）
7.	社民党	0（ 0.0%）
8.	れいわ新選組	1（ 0.4%）
9.	NHK から国民を守る党	0（ 0.0%）
10.	希望の党	0（ 0.0%）
11.	その他	2（ 0.8%）
12.	ない	151（60.6%）

Q43　（Q27で、「12. ない」と答えた方に）しいていえば、どの政党が支持できそうですか。ひとつだけ選んでください。

1.	自民党	69（27.7%）
2.	立憲民主党	12（ 4.8%）
3.	公明党	0（ 0.0%）
4.	日本維新の会	36（14.5%）
5.	共産党	0（ 0.0%）
6.	国民民主党	3（ 1.2%）
7.	社民党	1（ 0.4%）
8.	れいわ新選組	3（ 1.2%）
9.	NHK から国民を守る党	0（ 0.0%）
10.	希望の党	0（ 0.0%）
11.	その他	1（ 0.4%）
12.	ない	26（10.4%）
	非該当	98（39.4%）

Q44　では逆に嫌いな政党はありますか。あればいくつでも○をつけて下さい。

１．自民党	28（11.2%）
２．立憲民主党	55（22.1%）
３．公明党	56（22.5%）
４．日本維新の会	19（ 7.6%）
５．共産党	78（31.3%）
６．国民民主党	26（10.4%）
７．社民党	44（17.7%）
８．れいわ新選組	67（26.9%）
９．NHK から国民を守る党	112（45.0%）
10．希望の党	34（13.7%）
11．その他	1（ 0.4%）
12．ない	69（27.7%）

Q45　次にあげる社会のうちで、あなたの理想とする社会に近いのはどれですか。

１．自由に競争ができて、能力のある人はどんどん金持ちになれるが、暮らしに困る人もでる社会。　53（21.3%）

２．国が経済を統制するので、大金持ちにはなれないが最低限の生活は確実に保証されている社会。　47（18.9%）

３．能力のある人は金持ちになれるが、国がその人たちから高い税金をとって暮らしに困る人の面倒をみる社会。　149（59.8%）

Q46　日本はもっと経済的に発展すべきだと思いますか。

１．そう思う　191（76.7%）　　２．そうは思わない　58（23.3%）

Q47　近い将来、核兵器を使った戦争が起こると思いますか。

１．そう思う　74（29.7%）　　２．そうは思わない　175（70.3%）

Q48　現在の世界情勢から考えて、近い将来日本が戦争に巻き込まれる危険があると思いますか。

１．そう思う　143（57.4%）　　２．そうは思わない　106（42.6%）

Q49　いずれ日本も核武装したほうがよいと思いますか。

１．そう思う　49（19.7%）　　２．そうは思わない　200（80.3%）

Q50　戦争は絶対にいけないと思いますか。あなたのお考えにもっとも近いものを以下の中からひとつだけ選んで下さい。

1．いかなる場合でも戦争はいけない。　126（50.6%）
2．自国を他国からの侵略から守るためにはやむをえない。　114（45.8%）
3．他国の戦争であっても、助力の要請があれば介入してもよい。　6（ 2.4%）
4．必要があれば、積極的に戦争という手段を利用してもよい。　3（ 1.2%）

Q51　国連からの要請があった場合に日本の自衛隊を海外に派遣することについて、あなたは賛成ですか、それとも反対ですか。

1．賛成　76（30.5%）
2．反対　46（18.5%）
3．どちらとも言えない　127（51.0%）

Q52　日本の自衛隊をどうすべきだと思いますか。

1．増強すべき　62（24.9%）
2．現状維持　179（71.9%）
3．縮小すべき　8（ 3.2%）
4．なくすべき　0（ 0.0%）

Q53　あなたは「日の丸」に対して愛着を持っていますか。

1．非常に愛着を持っている　34（13.7%）
2．やや愛着を持っている　112（45.0%）
3．ほとんど愛着を持っていない　79（31.7%）
4．まったく愛着を持っていない　24（ 9.6%）

Q54　「君が代」を国歌と思っていますか。

1．思っている　236（94.8%）　2．思っていない　13（ 5.2%）

Q55　現在の日本の天皇制度では女性は天皇になれない規定になっていますが、あなたはこれについてどう思いますか。以下にあげるものの中でもっともあなたのお考えに近いものを選んで下さい。

1．現状の規定のままでよい　19（ 7.6%）
2．男性継承者を優先しつつ女性にも継承権を与えるように規定を変えるべき　92（36.9%）
3．女性にも男性とまったく同等の継承権を与えるように規定を変えるべき　129（51.8%）
4．そもそも天皇制自体を廃止すべき　9（ 3.6%）

Q56　最後に、あなたにとって、いちばん大切と思うものをひとつだけあげて下さい。

1.	自分自身、生命、健康	41（16.5%）
2.	家族、友人、恋人、人間関係	153（61.4%）
3.	愛情、優しさ、精神、心	16（ 6.4%）
4.	信念、能力、努力、信仰	10（ 4.0%）
5.	生きがい、夢、目標	3（ 1.2%）
6.	平和、真実、よい社会、正義	2（ 0.8%）
7.	自然、環境、地球	0（ 0.0%）
8.	時間、自由、ゆとり	10（ 4.0%）
9.	金、財産、地位、名誉	4（ 1.6%）
10.	その他	1（ 0.4%）
	DK.NA.	9（ 3.6%）